

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ペンコル・チューデ仏塔第5層の『金剛頂経』所説の マンダラ

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003547 |

ペンコル・チューデ仏塔第5層の 『金剛頂経』所説のマンダラ

森 雅 秀*

1. はじめに

ギャンツェのペンコル・チューデ仏塔の第5層の壁面には、金剛界マンダラを中心としたヨーガ・タントラのマンダラが描かれている。ペンコル・チューデ仏塔は、第1層から最上階の第7層に至るまで、タントラの階梯にしたがって諸尊が配置されている。第5層は第3層とともにヨーガ・タントラに配分されているが、このクラスの経典の中でもっとも重要な『金剛頂経』所説のマンダラが壁画の大半を占める。第5層は東西南北の四方にひとつずつ部屋が置かれ、いずれの部屋もほぼ同じ構造をとる。外側の壁面のほぼ中央に入口があり、その反対側、すなわち中心にもっとも近い壁面に、脇侍をともなった仏や女尊の像が各部屋の本尊として置かれている。そして、周囲の壁面はすべてマンダラによって埋められている。その数は61を数え、このうち40が『金剛頂経』に説かれているマンダラなのである。

第5層の『金剛頂経』所説のマンダラ群は、アーナンダガルバ Ānandagarbha による『金剛頂経』への注釈書『タットヴァ・アーローカ・カリー』 *Tattvālokakārī* (TTP, No. 3333, 以下 TAK) にきわめて忠実に描かれている。8世紀頃に活躍したとされるアーナンダガルバは、インドにおけるヨーガ・タントラの最重要の学匠として知られ、TAK の他にも金剛界マンダラ儀軌『サルヴァヴァジュローダヤ』 *Sarvava-jrodaya* や『悪趣清浄タントラ』に関する文献などを数多く著している¹⁾。彼の主著 TAK はシャーキャミトラ Śākyamitra の『コーサラ・アランカーラ』 *Kosalālamkāra* (TTP, No. 3326)、ブッダグヒヤ *Buddhaguhyā* の『タントラ・アルタ・アヴァターラ』 *Tantrārthāvatāra* (TTP, No. 3324) とともに、『金剛頂経』に対する三大注釈書として重視されている。とくに TAK は、これら3点の中でもっとも大部の注釈書で、チ

* 高野山大学

1) TTP, Nos. 3339, 3457-3460 etc.. 『サルヴァヴァジュローダヤ』はサンスクリット原典が一歩発表されている [密教聖典研究会 1986, 1987]。

ペット仏教においても絶大な権威を持っていた²⁾。『金剛頂経』のシステムについては後述するが、この經典全体では28のマンダラが説かれ、アーナンダガルバは TAK の中でこれを44種に拡大して注釈を行っている。ペンコル・チューデ仏塔の第5層に描かれている金剛界マンダラは、TAK のこの44種のマンダラなのである。

一般に金剛界マンダラと言った場合、『金剛頂経』の28種やアーナンダガルバの44種のマンダラのはじめに位置する金剛界大マンダラを指す。チベット密教の寺院やマンダラ・コレクションの中に、降三世大マンダラなどの他のマンダラをまれに見ることはあるが、その種類はきわめて限られている。ペンコル・チューデ仏塔の金剛界マンダラ群は、『金剛頂経』やアーナンダガルバの説くマンダラのはほぼ完全なセットして、現在知られている唯一の作例である。しかも、写真図版に示したように、その作風は精妙優美で、技巧的にもすぐれている。インド・チベットの密教史ばかりではなく、美術史的にもきわめて高い価値をそなえているのである。

ギャンツェのペンコル・チューデには、イタリアの東洋学者 G. トゥッチ (Guiseppe Tucci) を嚆矢として、さまざまな調査隊が訪れている。近年では、ローマの中遠東研究所 IsMEO が大規模な調査隊を派遣し、すでにその報告書も発表されている [Ricca and Lo Bue 1993]。第5層に関してもプランの提示とマンダラの比定を行っているが、第5層に限り、壁画の図版が一点も掲載されていない。わが国では、東北大学隊が1986年にこの地を訪れ、隊のメンバーであった奥山直司氏が仏塔全体の構造について報告している [1987, 1988, 1989]。ただし、金剛界のマンダラ群についてはあまりふれられていない。これらのマンダラの研究としては田中公明氏によるものが重要である。各マンダラの比定と全体のプランの提示を行い、主要なマンダラの特徴と『金剛頂経』との対応を概略的に示している。田中氏の近著 [1996] にはこの論文の改訂版が含まれ、あらたにカラー図版10点、モノクロ図版1点がくわえられた³⁾。しかし、これらのマンダラの典拠が TAK であることは明示されておらず、文

2) 後述するように、インド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ Abhayakaragupta は、金剛界マンダラに関するアーナンダガルバの説に対して批判的である。インドにおいては TAK の権威は必ずしも確立していなかったことが知られる。

3) カラー図版は以下の10点である。金剛界大マンダラ、降三世大マンダラ、金剛界三昧耶マンダラ、金剛界羯摩マンダラ、遍調伏大マンダラ、三世輪法マンダラ、一切義成就一印マンダラ、一切義成就四印マンダラ、毘盧遮那四印マンダラ、宝見四印マンダラ。またモノクロ写真は北室北壁西面で、一切義成就三昧耶マンダラと羯摩マンダラが含まれている。田中 [1988] に提示されたマンダラ配置図では、東室南面の降三世品の毘盧遮那四印マンダラと金剛フーンカーラ四印マンダラ、西面の三世輪大マンダラと三世輪三昧耶マンダラのそれぞれが逆に示されている。これは田中 [1996] においてもそのまま再録されている。なお田中氏にはペンコル・チューデの本堂にある、塑像による金剛界マンダラについての報告もある [1987] ([1996] にも再録)。

献との照合も『金剛頂経』本文やポドン Bo dong phyogs las rnam rgyal による儀軌⁴⁾に限られている。また、個々のマンダラについても十分な説明は加えられず、マンダラ内部の諸尊の配置も明らかにされていない。

このように、マンダラそのものの存在については、すでにトゥッチ以来知られていたにもかかわらず、その全体の図版の公表や、典拠となる文献との照合作業はこれまでほとんどなされていなかった。写真図版については、すでに前掲の図版頁において40点以上のカラー図版を示し、金剛界マンダラ群のほとんどすべてがはじめて明らかになった。この小論では、典拠となる文献を参照しながら、各マンダラの具体的な記述と説明を行い、世界にも例のないこの貴重なマンダラの全容を可能な限り詳細に示したい。なお、『金剛頂経』に説かれるマンダラについては、近年、乾仁志氏が論考を発表している [1995, 1996b]。これらの中で乾氏は、『金剛頂経』の28種のマンダラのひとつひとつについて、その名称、形態、含まれる尊格と尊容に関する考察を行っている。さらに必要に応じて TAK をはじめとする注釈書にも言及する。本稿においてもこれらの論考がきわめて有益であったことをとくに明記しておきたい⁵⁾。

2. 『金剛頂経』とマンダラ

『金剛頂経』は正式には『一切如来真实撰という大乘経』*Sarvatathāgatātattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra* という名称を持ち、一般には『真实撰経』*Tattvasaṃgraha* (以下 TS) と呼ばれている。これは『金剛頂経』という名称が18の文献からなる經典群 (十八会) の総称として用いられ、これと区別するためである。TS は十八会のはじめの經典に相当するため、『初会の金剛頂経』とも呼ばれる。7世紀の後半におそらく南インドで成立したと考えられている。

TS の全体は金剛界品、降三世品、遍調伏品、一切義成就品という4部 (四大品) によって構成されている。一切義成就品のあとに積タントラ (uttaratantra) がおかれているが、これはあくまでも付随的な部分である。金剛界品以下の四大品は仏部、金剛部、蓮華部、摩尼部という4つの部族 (kula) に対応している。部族とは、仏教の神々の世界を分類、統合するための概念である⁶⁾。大乘仏教から密教の時代にかけて仏教パネオンが形成され、尊格の種類が多様化すると、尊格の起源や特徴にした

4) Tibet House [1972]

5) このほか乾 [1996a] は乾 [1995, 1996b] の要約になっている。あわせて参照されたい。

6) 部族については頼富 [1981]、田中 [1988: 57-59] 参照。

がっていくつかのグループに分類されるようになる。初期の部族構成は、仏部、蓮華部、金剛部の三つの部族、すなわち三部からなる。このうち、仏部には釈迦を中心とする如来たち、蓮華部には観音（あるいは蓮華手）、金剛部には金剛手を中心とする尊格が含まれる。TSはこの三部に摩尼部を加えた四部からなる經典である。經典全体の中心となる仏、すなわち教主は毘盧遮那如来であるが、降三世品では金剛手、遍調伏品では観音が重要な役割を果たす。この2尊はそれぞれに対応する部族を代表する尊格である。新たに登場した摩尼部では、虚空蔵菩薩が中心的な位置をしめる。各部を示す名称は、そのまま部族を象徴するシンボルとなる。すなわち、金剛部は金剛杵、蓮華部は蓮華、摩尼部は宝（*mani* あるいは *ratna*）である。如来部のシンボルには、金剛部と同じ金剛杵が用いられる。これらのシンボルはマンダラを描くときにも重要なモチーフとなる。

後世、TSの伝統を受け継いだインド密教では、仏部、金剛部、宝部、蓮華部、羯摩部という五部族のシステムが主流となる。五部の思想はTSの発展段階にある經典『金剛頂タントラ』に至ってはじめて現れる。TSの摩尼部が、宝部と羯摩部の二つに発展するのである。それとともに毘盧遮那、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就のいわゆる五仏が、各部族の部族主の位置をしめる。これらの五仏はTSにも登場するが、TS全体を通じて現れるのは教主の毘盧遮那のみで、他の四仏の登場は如来部に相当する金剛界品に限られる。その他の三品では四仏にかわって各部族に応じた菩薩たちが、これらの位置をしめる。その中で、阿閼の位置を占めているのが、金剛手、観音、虚空蔵の三菩薩である。これにしたがってマンダラを構成する他の菩薩たちにも部族に応じた名称が与えられることになる。

TSを構成する四大品は、いずれも大マンダラ、三昧耶マンダラ、法マンダラ、羯摩マンダラ、四印マンダラ、一印マンダラという六つの部分に分かれている。各部がそれぞれ六つの章に分かれているのである。各章には、その名の通り、大マンダラをはじめとするマンダラがひとつずつ説かれる。各章の前半ではマンダラの神々が出現するプロセスが示され、後半では実際にこのマンダラを描き、灌頂儀礼を行う儀軌的な内容が中心をしめる。各尊の印の結び方やマントラなどが説かれるのも後半部分である。

6種のマンダラのはじめにあげられる大マンダラは、仏や菩薩たちの姿がそのまま表現されたマンダラで、他の5種のマンダラの基本となる。仏の世界の全体像を示したマンダラとすることができる。2番目の三昧耶マンダラは、中尊の毘盧遮那を除き、金剛杵や蓮華などのシンボルですべての尊格が表現されている。三昧耶マンダラの「三

昧耶」(samaya)とは、衆生救済という仏たちの誓約を示す語であるが、仏たちを象徴するシンボルそのものも意味している。シンボルによって表現され、仏のすがたは隠されているため、「秘密マンダラ」(guhyaṃaṇḍala)という名称でも呼ばれる。また、呪術的な機能を持つ言葉「陀羅尼」(dhāraṇī)とも関係を持ち、「陀羅尼マンダラ」(dhāraṇīmaṇḍala)と呼ばれることもある。仏や菩薩たちの救済的な側面が強調されたマンダラなのである。これに対し、法マンダラは仏の智慧に焦点を当てたマンダラである。仏たちの深遠な悟りの内容、すなわち「法」(dharma)を「微細な金剛」(sūkṣmavajra)によって象徴している。そのため、マンダラの諸尊は、すべて禅定に入った姿をとり、胸には各自のシンボルが小さく描かれている。さらに各尊は金剛の中に住しているとされる⁷⁾。第4の羯摩マンダラは仏の活動的な機能を表したマンダラである。仏たちの活動は「供養」(pūjā)として理解され、マンダラの各尊は、たがいに供物を捧げる姿で表現されている。

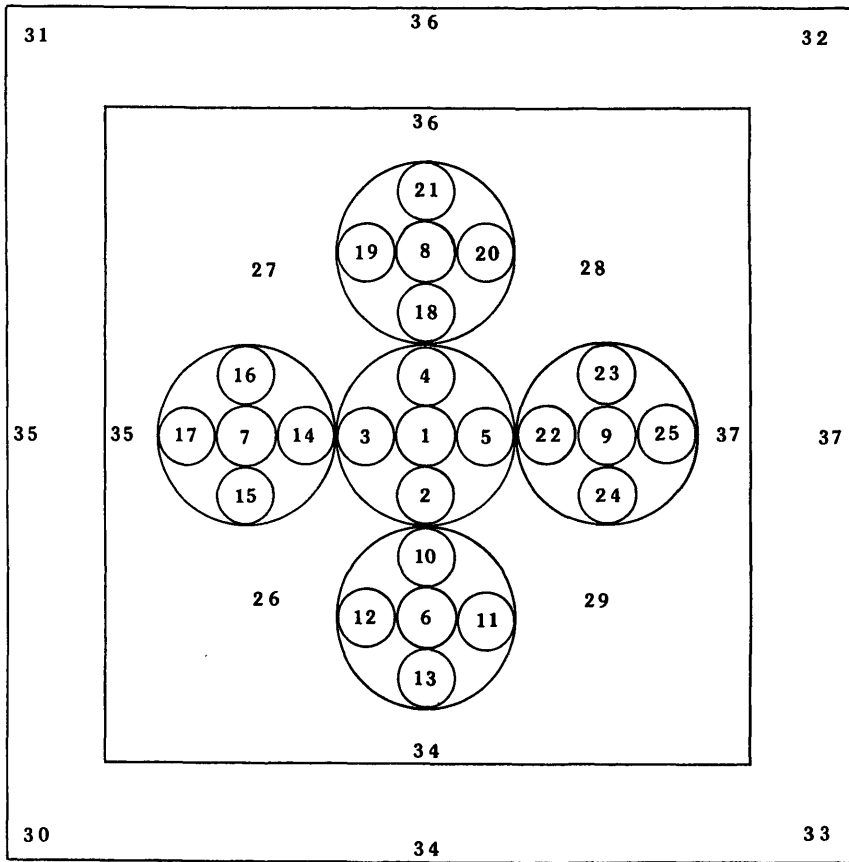
このように三昧耶マンダラから羯摩マンダラまでの3つのマンダラは、仏たちの持つさまざまな側面に焦点を当てて、その機能を象徴的に表現したマンダラである。そして、これら3つのマンダラの根源には、仏の世界の全体像である大マンダラが存在している。

一方、6種のマンダラの残り二つの四印マンダラと一印マンダラは、大マンダラの内容を簡略な形で示したものである。四印マンダラは中心となる尊格とその四方の4尊のメンバーからなる5尊のマンダラで、一印マンダラはさらに簡略化をはかった1尊のみのマンダラである。6種のマンダラは、全体像を示す大マンダラと、この基本形の機能分化をはかった3つのマンダラと、簡略化を進めた2つのマンダラにまとめることができる。

マンダラを構成する尊格は各部族によってことなるが、代表的な金剛界品を例にとって配列を示しておこう(挿図1)。

基本的にTSのマンダラは37尊によって構成される。毘盧遮那如来を中心に、その前後左右に位置する四波羅蜜、四方の四仏、四仏のまわりに4尊ずつ配される十六菩薩、8尊の供養菩薩、門衛である四摂である。このうち、十六大菩薩は4尊ずつのグループに分けられる。また八供養菩薩は内の四供養菩薩と外の四供養菩薩の二つのグループからなる。いずれの尊格も右回りに配置されるが、十六大菩薩のみは、中心となる仏の前、右、左、後ろの順に位置するため、右回りではなく、ジグザグに進むこ

7) 田中 [1988b: 10; 1996: 136] に、ほとんどの尊の心臓に赤い微細金剛が描かれているとあるのは誤りであろう。



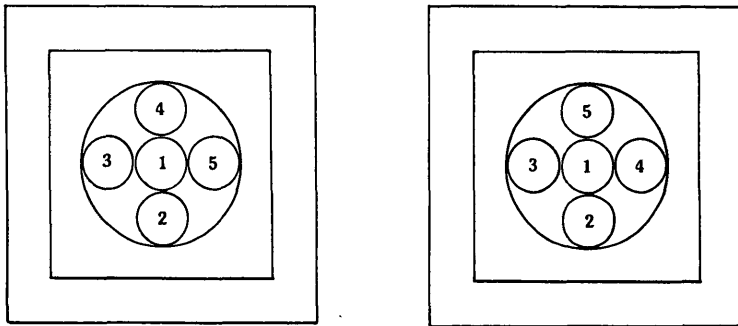
挿図1 金剛界大マンダラ諸尊配置図

表 1

| | | | |
|----------------|------------------|---------------|---------------|
| 1 毘盧遮那 四波羅蜜 | 十六大菩薩 10 金剛薩埵 | 20 金剛因 | 外四供 30 金剛香 |
| 2 薩埵金剛女 | 11 金剛王 | 21 金剛語 | 31 金剛華 |
| 3 宝金剛女 | 12 金剛愛 | 22 金剛業 | 32 金剛燈 |
| 4 法金剛女 | 13 金剛喜 | 23 金剛護 | 33 金剛塗 |
| 5 業金剛女 | 14 金剛宝 | 24 金剛牙 | 四摂 |
| 四仏 | 15 金剛光 | 25 金剛拳 | 34 金剛鈎 |
| 6 阿閼 | 16 金剛幢 | 内四供 26 金剛嬉 | 35 金剛索 |
| 7 宝生 | 17 金剛笑 | 27 金剛鬘 | 36 金剛鎖 |
| 8 阿弥陀 | 18 金剛法 | 28 金剛歌 | 37 金剛鈴 |
| 9 不空成就 | 19 金剛利 | 29 金剛舞 | |

とに注意しなければならない。これらの他に賢劫尊と呼ばれる菩薩の集団が、四摂と外の四供養菩薩をのぞいた29尊のまわりにおかれる。賢劫尊に関しては TS には「弥勒など」(maitreyādi)と言及されるのみで、具体的な尊名があげられていない。そのため、弥勒、不空見、除蓋障などの16尊(賢劫十六尊)をおく場合と、『賢劫経』などに説かれる賢劫千仏を四方に均等に配するふたつの説が存在する⁸⁾。ベンコル・チューデ仏塔の典拠となる TAK では、千仏の方の説を採用している。

6種のマンダラのうち、大マンダラから羯摩マンダラまでの4曼荼羅は、いずれもこれらの37尊と賢劫尊とで構成される、同じ規模、同じ形態のマンダラである。ただし、個々の尊格の表現方法は、すでに述べたようにマンダラごとにことなる。とくに、十六大菩薩は三昧耶マンダラと羯摩マンダラでは、前者では陀羅尼の尊格、後者では供養の尊格という性格により、TS において女性の名称で呼ばれている。また、毘盧遮那の周囲の四波羅蜜は三昧耶マンダラ以外のマンダラでもつねにシンボルで表現され、尊形(仏のすがた)で表されることはない。これも TS 本文に規定されている。四印マンダラは毘盧遮那を中心にして、その周囲に四波羅蜜を象徴するシンボルが説かれる⁹⁾。また、金剛界品では阿閼以下の四仏もそれぞれ四印マンダラを持つという記述もみられる。アーナンダガルバはこの規定を他の三品にも適用して、それぞれの品で5種の四印マンダラに言及している(挿図2)。阿閼以下の四印マンダラは、中



挿図2 金剛界四印マンダラ諸尊配置図(左:毘盧遮那四印,右:四仏四印)

8) 賢劫十六尊については森 [1993] 参照。賢劫千仏についてこの拙稿の中で、「四方に250尊ずつ配する」と述べたが、インド、チベットの伝統では賢劫千仏のはじめの4尊はすでに悟りを開いているため、マンダラには表現しない。そのため各方向は1尊ずつ欠ける249尊ずつが描かれることになる [田中 1996: 123]。ベンコル・チューデ仏塔でもはじめの4尊は現れない。

9) 四波羅蜜を毘盧遮那の周囲に置くのは金剛界品のみで、降三世品以下では阿閼などの四仏の位置に置かれる4尊のシンボルが、毘盧遮那の周囲に置かれる。

表 2

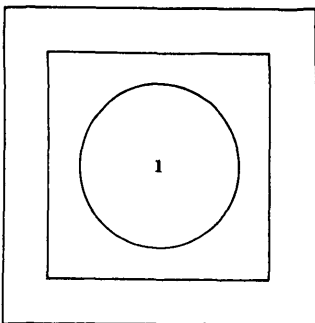
| 毘盧遮那四印 | 阿閼四印 | 宝生四印 | 阿弥陀四印 | 不空成就四印 |
|---------|------|------|-------|--------|
| 1 毘盧遮那 | 阿閼 | 宝生 | 阿弥陀 | 不空成就 |
| 2 薩埵金剛女 | 金剛薩埵 | 金剛宝 | 金剛法 | 金剛業 |
| 3 宝金剛女 | 金剛王 | 金剛光 | 金剛利 | 金剛護 |
| 4 法金剛女 | 金剛愛 | 金剛幢 | 金剛因 | 金剛牙 |
| 5 業金剛女 | 金剛喜 | 金剛笑 | 金剛語 | 金剛拳 |

※毘盧遮那四印は挿図 2 の左、他は挿図 2 の右の配置をとる。

中央の仏は尊形で表現し、その周囲には十六大菩薩の対応する四尊ずつが、シンボルの形で描かれる。大マンダラの四方の輪が独立した姿である。一印マンダラは金剛界品の場合、金剛薩埵一尊が中央に大きく描かれる。他の三品では金剛薩埵ではなく阿閼と同じ位置をしめる尊格が一印マンダラに選ばれる（挿図 3）。

このように TS の四大品において 6 種のマンダラが説かれているため、TS 全体では 24 種のマンダラが説かれることになる。またアーナンダガルバの流儀では、四印マンダラをさらに 4 種ずつ説くため、マンダラの数は合計して 40 になる。これらのマンダラは同一の品に含まれるものは共通の構成員を持つとともに、三昧耶マンダラ、四印マンダラ等の同じ種類のマンダラは四大品を通じて類似の表現方法をとる。

TS にはこのほかにさらに 4 種類のマンダラが説かれる。これらはいずれも降三世品に含まれ、やはり、大マンダラ、三昧耶マンダラ、法マンダラ、羯摩マンダラと呼ばれる。TS の第 2 部に位置する降三世品は、他の三つの大品に比べると特異な性格を持つ。降三世品も他の大品と同様、マンダラを構成する尊格の出生と、マンダラを用いた儀式に関する儀軌的な内容を持つが、降三世品の基調をなしているテーマは、



挿図 3 金剛界一印マンダラ

仏教の神々によるヒンドゥー神に対する勝利である。降三世品には、仏の教えにしたがわない大自在天 *Maheśvara* とその妻 *Umā*、そしてヒンドゥーの神々が金剛手によって仏教に改宗させられるエピソードが挿入されている。忿怒の姿をとった金剛手菩薩の威力をまのあたりにしたヒンドゥー神たちは、つぎつぎと仏教に帰依し、各自に仏教徒としての名称、すなわち灌頂名が与えられる。最後まで強硬に抵抗を続けた大自在天は、ついに金剛手によって昇天され、「金剛最上明」*Vajrayidyottama* という名で生ま

れ変わることになる¹⁰⁾。降三世品 (Trilokavijayakalpa) という名称自体も、ヒンドゥー神、すなわち三世の神々を降伏させた金剛手の偉業に由来する。そして、忿怒形をとったこのときの金剛手は、後世、「降三世 [明王]」Trailokyavijaya という名で呼ばれることになる。また、このときに怒りから発した「フーン」という音から、「金剛フーンカーラ」Vajrahūmkāra (金剛吽迦羅) という名称も金剛手は有する。

一方の大自在天以下のヒンドゥー神たちは「外金剛部」と呼ばれるグループを形成する。外金剛部の神々は、それぞれが活動する領域から飛行天、虚空天、地居天、地下天 (あるいは水居天) の四つのグループと、総括的な地位にある三界主の5つに分類され、それぞれに四神ずつの神の名があげられている。さらに各ヒンドゥー神は配偶神 (母天) を持つため、外金剛部は男神20、女神20の40神から構成され、これらの最高神として大自在天とウマーがいる¹¹⁾。また、男神との組み合わせを持たない4人の女神、ビーマー Bhīmā, シュリー Śrī, サラスヴァティー Sarasvatī, ドゥルガー Durgā が外金剛部に加わることもある。

四大品に説かれるマンダラは4つの部族と6種のマンダラという整然とした体系で構成されているが、降三世品のみは、この体系から若干、逸脱している。大マンダラは基本となる37尊と賢劫尊に加え、外金剛部の神々が大マンダラの周囲におかれる。また、6種のマンダラとは別に、すでに述べた4種のマンダラが説かれる。これら4種のマンダラは改宗したヒンドゥー神によって主として構成され、「三世輪のマンダラ」と総称される。降三世品のはじめの6種のマンダラを「出世間のマンダラ」に位置づけ、これに対し、「世間のマンダラ」とも理解されている。降三世品の三世輪マンダラを説く部分に「教勅分」という呼称が与えられていることから、「教勅マンダラ」とも呼ばれる。これによって、TS のマンダラの総数は四大品の6種ずつのマンダラ24種にこの三世輪マンダラの4種を加えた28種になり、アーナンダガルバの場合、44という数になるのである。

ギャンツェのペンコル・チューデ仏塔の第5層の壁画にはアーナンダガルバの44種のマンダラのうちの40種がのこされている。19世紀にサキャ派のゴル寺で編纂された

10) TS のこの部分については翻訳が発表されている [白石・酒井 1958]。この挿話がヒンドゥー教の聖典『マールカンデーヤ・プラーナ』*Mārkaṇḍeya-purāṇa* の中の「デーヴィー・マーハートミヤ」*Devimāhātmya* を下敷きにしてしていることは、すでに梅尾祥雲氏によって明らかにされている [1927: 335-337]。降三世明王のマントラとして有名な「オーム、スンバ、ニスンバ」(om sumbha nisumbha) ではじまるマントラには、「デーヴィー・マーハートミヤ」の中で女神によって殺されるアスラの王の名が現れる。「デーヴィー・マーハートミヤ」の内容については M. Mori & Y. Mori [1995] 参照。

11) 分類上は大自在天とウマーは三界主に属する。

マンダラ理論書『タントラ部集成』*rGyud sde kun bstus*には2種のTS所説のマンダラが説かれるが、これは金剛界大マンダラと降三世大マンダラである¹²⁾。『タントラ部集成』にもとづいたマンダラ・コレクションにもこれら二つのマンダラがおさめられている¹³⁾。わが国に伝わる九会の金剛界マンダラは、中央に金剛界大マンダラをおき、ここから外に向かって右回りに、金剛界の三昧耶マンダラ、法マンダラ、羯摩マンダラ、四印マンダラ、一印マンダラ、そして『理趣経』に説かれるマンダラをひとつはさみ、降三世品の大マンダラと三昧耶マンダラが配されている。TSのマンダラのはじめの8種に『理趣経』のマンダラを組み合わせた複合的なマンダラである。

TSに説かれるマンダラの全体を、TS本文に現れるマンダラの呼称とともに以下に示そう。TSとTAKに含まれるマンダラに関する記述の該当箇所もあわせて提示する¹⁴⁾。

表 3

| マンダラ | 名称 | TS | TAK |
|----------------|---------------|------------|------------------|
| 金剛界品 | | | |
| 大 | vajradhātu | 203-206 | 184.3.1-186.3.7 |
| 三昧耶 | vajraguhya | 345-355 | 214.1.1-214.5.2 |
| 法 | vajrasūkṣma | 449-451 | 223.5.4-224.1.5 |
| 羯摩 | vajrakarma | 519, 520 | 229.4.5-229.5.4 |
| 四印 | vajrasiddhi | 569, 570 | 237.1.1.-237.2.5 |
| 一印 | vajrasattva | 600, 601 | 228.2.3-6 |
| 降三世品 | | | |
| 大 | trilokavijaya | 849-889 | 252.3.1-255.3.1 |
| 三 | krodhaguhya | 996-1021 | 267.4.6-268.3.4 |
| 法 | krodhajñāna | 1083-1086 | 272.5.7-273.2.2 |
| 羯 | karmavajra | 1130-1133 | 275.4.7-275.5.2 |
| 四 | krodhavajra | 1176, 1177 | 282.5.6-283.1.7 |
| 一 | vajrahūmkāra | 1192-1194 | 286.5.8-287.1.8 |
| 降三世品三世輪 | | | |
| 大 | なし | 1262-1290 | 289.4.7-290.4.3 |
| 三 | なし | 1350-1355 | 294.5.5-295.4.1 |
| 法 | なし | 1387, 1388 | 298.3.5-298.5.7 |
| 羯 | なし | 1439-1444 | 3.4.1-4.5.1 |
| 遍調伏品 | | | |
| 大 | jagadvinaya | 1503-1537 | 12.1.1-12.5.8 |

12) 'JAM DBYANGS BLO GTER DBANG PO [1971]

13) BSOD RNAM RGYA MTSHO [1983: Nos. 22, 23]

14) 煩瑣をさけるため、これ以降、TSとTAKの該当箇所の指示はとくに必要とされる場合以外は省略する。

| | | | |
|--------|-------------|------------|---------------|
| | | | 17.3.6-18.4.6 |
| 三 | padmaguhya | 1619-1643 | 29.1.8-29.4.6 |
| 法 | dharmajñāna | 1715-1722 | 35.2.6-35.4.1 |
| 羯 | padmakarma | 1757-1767 | 37.3.7-37.4.6 |
| 四 | なし | 1804, 1805 | 40.3.8-40.4.8 |
| 一 | なし | 1820, 1821 | 43.2.1-7 |
| 一切義成就品 | | | |
| 大 | sarvasiddhi | 1863-1890 | 47.4.6-48.2.5 |
| | | | 53.4.3-54.4.8 |
| 三 | ratnaguhya | 1968-1986 | 65.1.3-65.5.1 |
| 法 | ratnajñāna | 2043-2045 | 71.2.6-71.3.5 |
| 羯 | ratnakarma | 2087-2089 | 75.1.5-75.2,5 |
| 四 | なし | 2116 | 77.3.6-77.4.4 |
| 一 | なし | 2124 | 80.2.3-8 |

※マンドラの名称と TS の該当個所は堀内 [1974, 1983] による (数字は堀内本の § 番号)。これらは乾 [1995, 1996b] に示されている。TAK は北京版 (TTP, Vols. 71, 72) の頁, 葉, 行を示す。

3. 全体の概要

ペンコル・チューデ仏塔にはアーナンダガルバによる44種のマンドラのうちの少なくとも40のマンドラが描かれていたと考えられる。そのうちわけを見ると、金剛界品、遍調伏品、一切義成就品の3品は、10種のマンドラがすべてそろっていた。ただし、現在では、金剛界品の阿弥陀を中尊とする四印マンドラと、同じく不空成就を中心とする四印マンドラ、そして法マンドラの三点が汚損のためほとんど確認することができない。これらはいずれも東室の入口から入って右側に集中している。降三世品は外金剛部の4種のマンドラは完備しているが、降三世品の出世間のマンドラのうち、3種の四印マンドラ (宝フーンカーラ、法フーンカーラ、羯摩フーンカーラをそれぞれ中尊とする3種) と一印マンドラが存在しない。これらの4種のマンドラが、はじめから描かれなかったとは考えられないため、現在では、TS 所説のマンドラ以外のマンドラが置かれている部分におそらく描かれていたのであろう。もっとも可能性が高いのは、西室北面の降三世羯摩マンドラの周囲である。現在、このマンドラの上左には名称不明のマンドラが描かれているが、形態は降三世品の四印マンドラにきわめて近い。中心となる羯摩マンドラも TS や TAK の記述に一致しない点も多く、様式的にも他の大多数のマンドラとは異なり、この壁面全体が修復を受けたことは明らかである。制作当初、羯摩マンドラの周囲に三種の四印マンドラと一印マンドラが描

かれていたとすると、アーナンダガルバの44マンダラはすべてそろっていたことになる。修復の際にはじめに描かれていたマンダラは忠実には復元されず、中央の羯摩マンダラと上部二つの四印マンダラのみがあやまったすがたで描かれたことが予想されるが、現状では想像の域を出ない。

現存する40種のマンダラの配置を見ると、ある程度の統一性が意識されていたと考えられる。第5層の4室のうちの南室をのぞく3つの部屋に40のマンダラは分散して描かれているが、大まかな配置は、東室に金剛界品、西室に遍調伏品、北室に一切義成就品があてられている。降三世品は出世間のマンダラが東室と西室の2室に分けられ、外金剛部のマンダラはすべて東室にまとめられている。降三世品以外の各品の中心となる大マンダラは、いずれも入口から入って右側の壁面の中央に大きく描かれている。大マンダラに続く3種のマンダラは入口の壁面の大マンダラ寄りにまとめられている。各部屋に入って大マンダラに向かい合うと、その右手の壁に三昧耶マンダラと法マンダラが上下に描かれ、さらに、入口の上の空間に羯摩マンダラが描かれている。これらの3種のマンダラはいずれも同じ大きさを持ち、大マンダラよりはひとまわり小さい。四印マンダラのうち毘盧遮那を中心とする第1の四印マンダラは、各部屋とも部屋の正面の壁面の向かって右の最上部におかれている。その他の4種の四印マンダラは各大マンダラの周囲にひとつずつ描かれる。これら4種の四印マンダラの配置は、東室の場合、壁面の向かって左上に阿闍、右上に宝生、左下に阿弥陀、右下に不空成就となっている。これに対し、西室と北室は、左下に四仏の阿闍に相当する遍調伏尊、あるいは一切義成就尊のマンダラがおかれ、そこから右回りに南輪、西輪、北輪に相当する四印マンダラが描かれている。遍調伏品と一切義成就品は同じ配置を示すが、金剛界品の四印マンダラのうち、これらと一致するのは北輪の不空成就の四印マンダラのみということになる。一印マンダラも遍調伏品と一切義成就品は毘盧遮那四印の下、すなわち、正面の壁面の右中央のマンダラになる。金剛界品ではこの位置には三世輪の三昧耶マンダラがおかれ、一印マンダラは毘盧遮那の四印とは、東室の本尊をはさんで対となる位置、すなわち正面の壁面の向かって左上におかれる。四印マンダラと一印マンダラはいずれもほぼ同じ大きさで、三昧耶マンダラから羯摩マンダラに比べるとさらにひとまわり小さくなる。マンダラに三段階の大きさを設定して描いていたようである。

このように四印マンダラ、一印マンダラで若干の配置の相違があるが、降三世品以外の三大品のマンダラは、ほぼ共通の配置でマンダラがおかれている。これに対し、降三世品のマンダラは、2室に分かれて描かれている。大マンダラは東室に入って右

側の壁面の中央に描かれ、三昧耶マンダラと法マンダラは入口の壁面の左寄りに、やはり上下に描かれている。東室全体を見ると、金剛界品と降三世品のはじめの三種のマンダラが対称的におかれることになる。第四の降三世羯摩マンダラは、西室の入って左側の壁面におかれている。遍調伏品の大マンダラと向かい合うことになる。ただし、すでに述べたように、羯摩マンダラは後世、補修がほどこされ、文献の記述とも合致しない点が多い。また、上部左右のマンダラも、先述の通り、現在のものは降三世の四印マンダラには比定できない。降三世品の残り二つの四印マンダラは東室の降三世大マンダラの上部左右に描かれている。向かって右上に毘盧遮那の四印、左上に金剛フーンカーラの四印で、後者は東輪の仏たちのマンダラである。

外金剛部の四種のマンダラも東室に描かれる。入って正面の本尊仏の左右に二つずつ上下に配置されている。マンダラの順序にしたがえば、大マンダラが向かって右下、三昧耶マンダラが右上、法マンダラが左下、羯摩マンダラが左上となる。

これらの TS 所説のマンダラの大半は、制作当初のままの姿で現在ものこされているが、降三世品の一部のマンダラのように、汚損や損傷などの理由で後世、補修を受けたり、全体が描き直されたものがある。このうち、全体があらたに描き直されたマンダラは、金剛界品宝生四印マンダラ、降三世品羯摩マンダラ、遍調伏品羯摩マンダラ、遍調伏品蓮華三摩地四印マンダラ、一切義成就品の一切義成就四印マンダラ、同じく宝蓮華マンダラの合計6種、一部、修復を受けたマンダラは金剛界大マンダラ、金剛界品三昧耶マンダラ、金剛界品一印マンダラ、遍調伏品三昧耶マンダラ、一切義成就大マンダラの4種である。

オリジナルと考えられる大多数のマンダラは、細部の表現の違いから、おそらく複数の絵師の手になると考えられるが、表現様式やモチーフはおおむね共通している。マンダラの形態は四大品やマンダラの種類でそれぞれ異なるが、いずれにも共通する部分で主要な特徴を確認しておこう。全体は火炎と金剛杵の丸い帯によって囲まれ、その中に四角い楼閣がおかれる¹⁵⁾。ここに描かれた楼閣の各区画の大きさやそこに現れるモチーフ、四方に開いた門、その外側に描かれるトーラナなどは、インドの文献においても確認できるが、チベットにおいてももっとも標準的なものである¹⁶⁾。ただし、いくつかの装飾モチーフはこの地のマンダラに独特である。たとえば、外廊

15) 後述するように外金剛部の一部の楼閣は四角ではなく円形である。

16) 12世紀初頭、アバヤーカラグプタによって著されたマンダラ儀軌書『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* にはマンダラの形態が具体的に説かれているが、ペンコル・チューデのこれらのマンダラはその記述に正確に一致する。インドにおけるマンダラの形態については森 [1996a] 参照。

(kramaśīrṣa) と呼ばれる部分に赤と紺の彩色が交互に現れる, 瓔珞半瓔珞 (hārārdhahāra) の帯に, 半月に乗った円形もしくは金剛杵の飾りが描かれる, ヴェーディー (vedī) と呼ばれる部分に青と黄色の舞踏の人物が各辺にそれぞれ4人ずつ描かれる, などの点あげられる。周囲の火炎輪も独特の火炎の表現が見られ, 楼閣と外周とによってはさまれた部分には植物を思わせる見事な装飾が, また楼閣内部の大地の部分には, 開敷蓮華を連ねた文様や咲きほこる草花が単純化されて美しく表現されている。これらの独自の装飾モチーフは修復された作品ではほとんど失われてしまっている。楼閣の外壁におかれた装飾品もインドの文献の中に確認できる¹⁷⁾。すなわち, 傘蓋, 如意幢, 風にたなびく旗, 鈴をつけたのぼり, 七宝を飾る如意樹, トーラナの左右におかれた金剛杵の鈷と, それをくわえる海獣マカラなどである。これらの装飾品は大マンダラ以下の4つのマンダラではほとんど共通であるが, 四印マンダラと一印マンダラではいくつか省略される。たとえば, 七宝を飾る如意樹はこれらのマンダラでは表現されない。

4. 各マンダラの特徴

4.1 金剛界品

4.1.1 金剛界大マンダラ (図6, 7)

TS に説かれるすべてのマンダラの基本となる金剛界大マンダラは, 東室の北面に描かれている。向かって右の部分, マンダラの方角で言えば北に相当する部分¹⁸⁾ に一部補修がほどこされているが, 中心部をふくめその他の部分はおそらくオリジナルの姿をのこしている。全体は二重の楼閣から構成され, 二つの楼閣は尺度が異なるだけで同じ形態, 同じデザインを持つ。ただし, 内側の楼閣にはトーラナが描かれない。二つの楼閣の間は賢劫千仏によって埋め尽くされ, 外の楼閣の四隅に作られたわずかなスペースに外の四供養菩薩がおかれる。各楼閣にはそれぞれ四摂菩薩が門護として門に描かれるため, マンダラ全体には二組の四摂菩薩が含まれることになる。内側の楼閣には楼閣の壁面にそって円形の黒い帯がおかれ, 金剛杵がデザインされている。さらにその内部には同じ金剛杵の帯が井桁のかたちで描かれ, これによってできた九つの区画のうち, 中心と四方の5つの区画にはさらに金剛杵の円がおかれている。中

17) 前注の『ヴァジュラーヴァリー』に含まれる。

18) マンダラを壁面に描く場合, 上が西, 下が東になる。

中央の円には毘盧遮那と四波羅蜜、東以下の4つの円にはそれぞれ対応する仏と四菩薩が描かれる。9つの区画の残り四つの部分には内の四供養菩薩が位置する。毘盧遮那はマンダラの上部、すなわち西に頭を向け、その他の尊格はいずれもマンダラの外の方角に頭を向ける。マンダラ全体は二本の対角線で区切られた4つの部分がそれぞれ異なった色で塗り分けられ、東に相当する下の部分は濃紺、以下右まわりに南は黄色、西は赤、北は緑となっている。この配色はTSのマンダラすべてに共通する。

TSとTAKに含まれるマンダラに関する記述にしたがって、これらの特徴を順に確認してみよう。

マンダラ全体の形態はTSの中で次のように規定されている。

四角で四門、4つのトーラナによって飾られる。4本の線がただしく交わり、布や花輪によって飾られる。隅の部分すべてと、門と門扉が接するところには金剛と宝をつける。[このように] 外のマンダラの線を引け。

以上が外側の楼閣の説明で、全体は四角形で四方に門を開き、その上にトーラナがあることがわかる。マンダラの形態を規定するこの文章は、TSの他のマンダラの形態を説明するときにも繰り返し現れ、さらにTS以降の多くの経典に、一部変更をくわえられながら、何度も登場する¹⁹⁾。

これに続いて、外側の楼閣の内側が次のように説明される。

金剛の線によって囲まれ、8本の柱で飾られ、輪の形に似たその内側の都城(pura)に入場し、金剛の柱の上に5つの月輪のマンダラを飾り、中央のマンダラの[さらに]中央に仏のすがたを安置せよ。

前半の規定から、楼閣の内部にさらに宮殿(都城)があることが知られる。アーナンダガルバは「輪の形に似た」という説に対し、「四角で四門をそなえた外輪のマンダラのように」と説明をくわえ、さらに、トーラナは描かないことを指示する。外の楼閣と同じ形態を持ち、トーラナをおかない宮殿が内側におかれるのである。ベンコルの金剛界大マンダラもこの規定に忠実にしたが、同じ形式の二重構造の楼閣を描き、内側の楼閣にトーラナがないことはすでに見たとおりである²⁰⁾。

19) インドにおけるマンダラの形態の変遷と、TSを典拠とするこの偈については森 [1996a] 参照。

アーナンダガルバは、さらに TS 本文の「内の都城が輪のようである」という点に対して、この定義をそのまま受け取り、その形態が四角ではなく、四門もないとする説は誤りであると注意する。実際、内の都城のさらに内側には、金剛杵の帯が丸く描かれているが、アーナンダガルバによれば、これは TS の「金剛の線で囲まれ」という部分に対応し、「輪のようである」という定義の「輪」とは四角い外のマンダラを指す語で、形態が円であるわけではないと説明されている²¹⁾。

TS の「金剛の柱」という語は、金剛界品のシンボルを示す語として重要である。金剛の柱とは「金剛の線」で囲まれた部分に描かれて、たがい垂直に交わる 2 本の線である。この線に仏部のシンボルである金剛杵が描かれているのである。この部分のデザインは、四大品の各品によって異なり、各部族のシンボルと密接に結びついた形態をとる²²⁾。

内側の都城の形態を規定する TS の後半部分、「5つの月輪のマンダラを飾る」ことについてアーナンダガルバは次のように注釈する。

五仏のところには5つの月輪をおき、それぞれにさらに5つずつの月輪をおき、金剛の円で囲まれるように線を引く。これは「四角で四門、8本の柱で飾られ、金剛の輪で囲まれた中央のマンダラを描け」などと『金剛頂タントラ』*Vajrasekharatantra* で世尊が説いておられるので問題はない。

「五仏のところ」とはすでに述べたように金剛の柱によって区切られた九つの区画のうち中央とその四方の四箇所である。ここにひとつずつ大きな月輪を描き、さらにその上にそれぞれ5つずつの月輪をおくようアーナンダガルバは指示している。五仏と四波羅蜜、十六大菩薩の各尊が月輪に乗ることになるのである。そして大きい月輪

20) 内側の楼閣にトーラナがないことは TS には明記されていないが、インドの学匠たちは強く意識していたらしい。アバヤーカラグプタは『ヴァジュラーヴァリー』の中で、「内の都城」を「第2の内マンダラ」とよびかえ、その形態を「[全体は]四角で、門、門扉などから外廊まではそなえているが、トーラナなどはない」と規定している。さらに彼は「中心の楼閣にトーラナがある」と TS に説くのは降三世品のマンダラだけであると強調する。実際、降三世品のマンダラには内側の楼閣にもトーラナが描かれる。

21) この点については梶尾祥雲氏も簡単にふれている [1927: 202-203]。ただしアーナンダガルバのように TS 本文の「輪」(cakra) という語を四角い形態の楼閣に理解することには無理があるであろう。

22) 後世、秘密集会マンダラのようにひとつのマンダラに5部をすべて集約したマンダラが現れると、柱に各部族を象徴するシンボルが描かれる。たとえば、宝生のまわりの柱には宝、阿弥陀のまわりには蓮華がそれぞれ描かれる。また、サンヴァラマンダラのように車輪をモチーフにしたマンダラでは車輪の輪の部分にやはりシンボルが描かれる [森 1993b: 209-210]。

の方は金剛杵の円によってさらに囲まれることになる。アーナンダガルバはこれらの根拠に『金剛頂タントラ』を引用しているが、同経の文章には月輪の存在については何もふれられていない。五仏以下の25尊が月輪に乗ることについては、これに反対する立場もインド内部にはあった²³⁾。

先の TS 本文の引用文の最後の部分「中央のマンドラのさらに中央の部分に仏のすがたを安置せよ」というのは、マンドラの中尊である毘盧遮那を描くことを指示したところである。これに続いてマンドラを構成する他の尊格について TS は次のように述べる。

仏のすべての方角の輪の中央に四つの最高の三昧耶 (samaya) を順に描け。金剛の歩み (vajravega) によって四つにマンドラにすすみ、阿閼以下の四仏のすべての仏を置け。持金剛 Vajradhara などをともなった阿閼のマンドラを等しく作れ。金剛蔵 Vajragarbha などによって満たされた宝生のマンドラを [作れ]。金剛眼 Vajranetra などをともなった阿弥陀の清浄なマンドラを、金剛種々 Vajraviśva など飾られた不空成就の [マンドラを] 描け。輪の四隅に金剛の女神を描け。外のマンドラの四隅には仏の供養女を描け。すべての門の中央には四人の門護を、外のマンドラには偉大な薩埵 (摩訶薩) を置け。

マンドラの中心に毘盧遮那を描いたあと、その四方に三昧耶、すなわちシンボルを描く。これらは四波羅蜜のシンボルで、TS のすべてのマンドラを通じて、四波羅蜜はシンボルで表現される。「四つのマンドラ」とは四方におかれた阿閼等の四仏と十六大菩薩の月輪 (四方輪) を指す。四仏の名称は明記されているが、十六大菩薩に関しては、持金剛、金剛蔵、金剛眼、金剛種々の四菩薩の名称があげられるのみである。このうち、持金剛は金剛薩埵を指し、残りの3尊は順に金剛宝、金剛法、金剛業の灌頂名である。四方輪のそれぞれの菩薩のグループのはじめの尊に相当する。「金剛の女神」は内の四供養菩薩、「仏の供養女」は外の四供養菩薩を指す。門護が四摂、偉大な薩埵が賢劫尊に相当することは言うまでもない。

金剛界マンドラを構成する37尊と賢劫尊については TS の中でこのように場所と名称が示されているが、具体的な尊容はまったく言及されない。シンボルで表現される

23) アバヤーカラグプタは『ヴァジュラーヴァリー』の中で、五仏の住居に金剛杵の輪をひとつずつ描くだけで、それぞれ5つずつの月輪を描けというアーナンダガルバの説は誤りであると述べる。

四波羅蜜についても同様である。アーナンダガルバは TAK の中で個々の尊格の尊容についてくわしく述べている。ペンコル・チューデ仏塔でもこれらの記述に基づいて壁画が描かれている。

中尊の毘盧遮那についてアーナンダガルバは、身色は白で、最上菩提印 (*bodhy-agrīmudrā) を結ぶ両手で五鈷金剛杵を持ち、獅子の座の上の蓮華と月輪に金剛結跏趺坐 (*vajraparyāṅka) で坐ると述べる²⁴⁾。さらに、四面をそなえ、その身は太陽の輝きにあふれ、絹でできた上衣と下衣を付け、頭には宝冠をいただき、絹の冠帯も飾る。このうち、獅子の座については TS 本文中では言及はないが、ペンコル・チューデ仏塔の作例では左右に獅子を配した台座に毘盧遮那はすわり、同様の獣坐は四方の四仏にも認められる。四仏の身色と印、持物などは TAK の中ではまとめて説明される。阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就の順に身色は青、黄色、赤、緑、印は触地印、最上の与願印、最上の定印、施無畏印、持物は金剛杵、金剛宝、金剛蓮華、羯摩杵である。台座の動物は象、馬、孔雀、ガルダにかわる。いずれも一面で毘盧遮那の方を向くとされる。

四波羅蜜のシンボルは、薩埵金剛女が赤い五鈷杵、宝金剛女が先に五鈷杵のついた如意宝、法金剛女が16の花卉のある蓮華、業金剛女が12鈷の羯摩杵となっている。このうち、16弁の蓮華は赤白色で、8弁は下向き、8弁は上向きに開き、中央には五鈷杵が入っているという。また、最後の羯摩杵は5色からなり、中央は白、前は青、右が黄色、後ろが赤、左がエメラルド (marakata) の色、すなわち緑と規定されている。

TS では金剛薩埵などの4尊の名称のみがあげられた十六大菩薩については、アーナンダガルバは次のような尊容を列挙する (カッコ内は身色)。

| | |
|--------|--|
| 薩 (白) | 左手に金剛鈴、右手は胸の前で金剛杵を持つ。 |
| 王 (黄) | 金剛の鈎で一切如来を引き寄せる。 |
| 愛 (赤) | 弓矢で一切如来を射るようなしぐさをする。 |
| 喜 (緑) | 祝福を与えるしぐさで、両方の金剛拳で一切如来を喜ばせる。 |
| 宝 (黄) | 左の金剛拳で宝の列を握り、誇らしげにする。[右手で] 先が五鈷杵の如意宝を持つ。 |
| 光 (陽光) | 右手には金剛の日輪を持ち、如来を照らす。左手は座の上におく。 |

24) 最上菩提印については立川 [1995: 27-29] 参照。

| | |
|-----------------------|---|
| 幢（虚空の色） | 右手は如意宝をつけた幢，左手は座の上におく。 |
| 笑（白 ²⁵⁾ ） | 右手は両端に金剛杵をつけた2列の歯を持ち，如来を笑わせる。左手は座の上。 |
| 法（白赤） | 左手は金剛の蓮華を脇に持つ。右手はその花卉を胸の前で開く。 |
| 利（青） | 左手は胸の前で般若経の梵夾を持つ。左手は剣を持つ。 |
| 因（黄） | 右手は中指の先で八輻輪を回す。左手は座の上。 |
| 語（銅色） | 右手は金剛の舌を持つ。左手は座の上。 |
| 業（雑色 ²⁶⁾ ） | 左の金剛拳は金剛鈴をともなった羯摩杵をほこらしげに持つ。右手は中指で胸の前に羯摩杵を持つ。 |
| 護（黄） | 両手で金剛の甲冑を持つ。 |
| 牙（黒） | 鼓腹で牙を有する。顔の両側で二つの牙を両手に握る。 |
| 拳（黄） | 両手の中に金剛杵を持ち，その手で顔を押し。 |

TS では「金剛の女神」と呼ばれる内の四供養菩薩，「仏の供養女」と呼ばれる外の四供養菩薩，そして門衛の四摂の12尊について，アーナンダガルバは次のように尊容を規定する。

| | |
|-------|---|
| 嬉（白） | 両方の金剛拳で二つの五鈷杵を保ち，金剛杵を立てたしぐさで踊る。左に体を少し傾ける。 |
| 鬘（黄） | 宝の環で如来を灌頂する。 |
| 歌（白赤） | ヴィーナーを演奏する。 |
| 舞（雑色） | 身色は金剛業に同じ。三鈷杵を持ち，両手で舞をおどる。 |
| 香（白） | 金剛の香の器で如来を満足させる。 |
| 華（黄） | 左手で金剛の花の器を持ち，左手で花を雨のように降らせる。 |
| 燈（赤白） | 灯明の柄を持ち，光で供養する。 |
| 塗（雑色） | 身色は舞女に同じ。左手は香を入れたほら貝，右手は如来を香で供養する。 |
| 鈎（白） | 金剛の鈎で如来を導く。 |

25) テキストは「蓮根のような白」である。

26) テキストによれば，頭から腰までと両腕は白みがかった青，残りは青。あるいは顔の下から腰までが赤白，大腿部は黄白，残りの足の先までは白。

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 索（黄） | 金剛の絹索で如来をとどめる。 |
| 鎖（赤白） | 金剛の鎖で如来を縛る。 |
| 鈴（雑色） | 右手で金剛鈴を持ち、如来を入れる。左手は座の上におく。 |

なお、すでにふれたように金剛鉤以下の四摂菩薩はペンコル・チューデ仏塔では内側の都城と外側の楼閣のそれぞれに描かれている。これは TS 本文の「すべての門」という語に対して、アーナンダガルバが「内と外の 2 重の門の両者に四摂をおく」とくわえた注釈にしたがったものである。

アーナンダガルバは以上の 37 尊の具体的な尊容の記述を終えたあとで、「如来は寂靜の表情をし、あらゆる飾りで飾られ、寂靜のまなざしとはほえみを浮かべる。金剛薩埵以下 [32 尊] は歓喜の表情で、ほほえみを浮かべ、五仏の宝冠と絹の冠帯を頭につけ、あらゆる飾りで飾られている」とまとめている。最後に賢劫尊の説明として、東に位置する弥勒を始めとする尊は金剛薩埵のように金剛杵を持つとのべ、以下、南は金剛宝のように宝、西は金剛法のように金剛蓮華、北は金剛業のように羯磨杵を持つとする。いずれも各方角の第 1 の菩薩と同じ持物を持つのである。

4.1.2 金剛界三昧耶マンダラ (図11)

金剛界品の三昧耶マンダラは、ペンコル・チューデ仏塔では東室の東面に描かれている。表面に亀裂が入り、西のトーラナとその周辺が後世の補修を受けている。マンダラの形態は大マンダラと同じであるが、三昧耶マンダラの名の通り、すべての尊格が三昧耶形すなわちシンボルで描かれている。三昧耶マンダラが大マンダラと同じ形態をとることについては、TS 本文に「大マンダラにしたがってマンダラを描け」という規定がある。類似の規定はこれ以降の各マンダラにも見られ、四大品のいずれにおいてもそれぞれはじめに説かれる大マンダラが基本の形態を示すと考えられていた。

すでに述べたように、三昧耶マンダラではすべての尊格が陀羅尼と結びつけられ、女尊として理解されている。これらの尊格がどのようなシンボルによってマンダラに描かれるかについて、TS 自体にかなり詳しい記述がある。アーナンダガルバがその多くにさらに説明をくわえているので、まず五仏と十六大菩薩のシンボルを以下に示そう。

表 4

| TS | TAK |
|-----------------|---|
| 毘 仏塔 | 蓮華と月輪の上に先端を西に向けて描く |
| 阿 金剛金剛 | 水平においた五鈷杵を描き、その上に第2の五鈷杵を先端を東に向けておく |
| 宝 金剛宝 | 先端に羯摩杵がついた如意宝で、先端を南に向ける |
| 阿 金剛蓮華 | 白赤の16弁の蓮華。さらにその中に8弁の蓮華を置き、中央に五鈷杵を先端を西に向けて置く |
| 不 羯摩杵 | 12個の羯摩杵で、先端を北に向ける |
| 薩 金剛杵 | (注記なし) |
| 王 直立した2本の鈎 | (注記なし) |
| 愛 金剛杵に組まれた金剛杵 | (注記なし) |
| 喜 祝福を与える両腕 | 金剛杵を持ち、祝福を与える両腕 |
| 宝 火炎の宝 | 如意宝 |
| 光 太陽の印 | 日輪の中央に五鈷杵を置く |
| 幢 火炎をともなうすぐれた幢 | 如意宝の幢 |
| 笑 二つの金剛杵の間にある齒列 | 金剛杵の間にある2列の齒 |
| 法 金剛の中の蓮華 | 先述(阿弥陀の項を指す)の金剛蓮華の中央に五鈷杵 |
| 利 火炎をともなう劍 | 金剛劍 |
| 因 金剛の輻のある金剛杵 | ひとつひとつの輻が独鈷のような八輻輪 |
| 語 火炎をともなう舌 | 五鈷杵のついた舌 |
| 業 全方角に先を向けた金剛杵 | 先述(不空成就の項を指す)の羯摩杵 |
| 護 金剛の付いた甲冑 | 両側に金剛杵の付いた甲冑 |
| 牙 金剛の牙 | 中央に金剛杵がある二つの牙 |
| 拳 両手の拳の印 | 三昧耶の拳でしっかり握った五鈷杵 |

※TS § 344-355, TAK214.1.8-5.2 による。

四波羅蜜について TS は「大マンダラのように描く」とするので、先述の大マンダラのシンボルがここでもそのまま用いられることになる。八供養菩薩、四摂、賢劫尊については TS は「それぞれのシンボルを描け」と述べるにとどまり、具体的な名称をあげていない。アーナンダガルバによれば、内の四供養菩薩は順に二つの五鈷杵、金剛の宝の環、金剛のヴィーナー、三鈷杵を持って舞のしぐさで踊る両腕、外の四供養菩薩は香炉、金剛の花であふれた花器、金剛の灯明の柄、塗香の金剛のはら貝がそれぞれあげられている。四摂菩薩はそれぞれ名称どおりの金剛鈎などがシンボルとなる。賢劫尊は東に249個の五鈷杵、同様に南には金剛宝、西には金剛蓮華、北には羯摩杵が描かれる。シンボルの数まで明記されている。また千仏ではなく十六尊を描く説にもふれ、その場合も千仏と同じシンボルを各方角に4つずつ置く。ペンコル・チューデ仏塔の場合、賢劫尊はつねに千仏で、賢劫十六尊が現れることはない。

4.1.3 金剛界法マンダラ

金剛界法マンダラは金剛界三昧耶マンダラの下に描かれているが、現在では汚損がいちじるしい。大まかな形態と、向かって右側の一部は彩色も確認できるが、個々の尊格の尊容は確認できない。

TS の記述と他の三大品の法マンダラを参照することによって、金剛界品の法マンダラのすがたをある程度復元できる。TS には「大マンダラのように摩訶薩を置け」とあり、マンダラの形態と諸尊の配置は三昧耶マンダラと同様、大マンダラに準ずる。各尊の描き方については、「中央に仏を描く。諸仏のマンダラにおいても〔同様に〕」と TS にあり、さらに「胸に各自のシンボル (mudrā) をおいた摩訶薩が描かれるべきである」と述べられる。そしてこれらの尊格は「三昧に入り、金剛縛 (vajrabandha) を両手で結ぶ」という。アーナンダガルバは仏を金剛杵の中に描くことについて、すでに述べた鳥獣座の上に五鈷杵を正しく描き、その上に五仏をおくよう指示する。五仏が獅子等の鳥獣座に乗ることは TS の本文には見られないが、他の三大品の法マンダラにおいても表現されており、ここでも描かれていたはずである。また、金剛杵の中に尊格の姿を描くことについては、アーナンダガルバはそれ以外の尊格にも共通する特徴であると述べる。さらに、法マンダラに固有の特徴として、三昧に入ったすがた、すなわちアーナンダガルバによれば「結跏趺坐を組み、禪定に入った」状態で各尊が表現され、それぞれが胸に自分のシンボルを持つことがあげられる。アーナンダガルバは「各自のシンボル」について、「毘盧遮那から賢劫尊に至るまで、心臓の外 (すなわち胸) に、米粒大の各自のシンボルを保ち、金剛拳で〔禪定の印を〕結ぶ」と説明する。マンダラを構成するすべての尊格が結跏趺坐を組み、定印を結び、自分のシンボルを胸においた姿で描かれていたことがわかる²⁷⁾。金剛杵の中に入っている点もすべての尊格に共通である。ただし、他の三大品の法マンダラにおいても類似の規定が見られるにもかかわらず、尊格の背景などに金剛杵のすがたは明瞭には表現されていない。ここでも同様の表現がとられていたと考えられる。

各尊の胸に持つシンボルについて、TS は具体的な名称をあげていない。アーナンダガルバは十六大菩薩のシンボルとして、以下のような名称を列挙している。

27) わが国に伝わる金剛界マンダラでも九会の現図曼荼羅では37尊はすべて金剛杵を背にして、それぞれ固有の持物を持って描かれている。ただし定印は結んでいない。また「五部心観」では定印を結んだ手に各自のシンボルを持って描かれている。背景の金剛杵は毘盧遮那のみに現れる。

表 5

| | シンボル | シンボル | シンボル | シンボル |
|---|------|------|------|-------|
| 薩 | 金剛杵 | 宝 宝 | 法 蓮華 | 業 羯摩杵 |
| 王 | 金剛鉤 | 光 太陽 | 利 劍 | 護 甲冑 |
| 愛 | 弓 | 幢 幢 | 因 輪 | 牙 牙 |
| 喜 | 腕 | 笑 笑 | 語 舌 | 拳 拳の形 |

※TAK223.1.6-7 による。

これらはいずれも三昧耶マンドラに描かれたシンボルや大マンドラで各尊の手にする持物（あるいは印）とほとんど同じである。その他の尊についても同様であろう。また、四波羅蜜はここでも尊形ではなく、シンボルで表現されていたと考えられる。他の三大品の法マンドラの場合も同じである。

4.1.4 金剛界羯摩マンドラ (図12, 13)

金剛界羯摩マンドラは仏塔の東室の入口上部の壁面に描かれている。保存状態はきわめて良好で、尊容も細部に至るまでよく確認できる。羯摩マンドラは諸仏、諸菩薩の活動、すなわち供養のすがたを表したマンドラとされる。マンドラに関する TS の記述は簡略で、「大マンドラにしたがって仏のすがたを安置せよ。金剛薩埵など [のすがた] にしたがって、印を持った女尊を描け」と述べるにとどまる。アーナンダガルバは五仏に関しては、その尊容は金剛界大マンドラと同じであるとし、その他の尊についても「金剛薩埵などにしたがって、印やシンボルをともなった姿で描く」と述べる。TS に「女尊を描け」とあるのは、供養を象徴するマンドラにふさわしく、菩薩はいずれも女尊の姿に変わるからであるが、アーナンダガルバの記述からは、女尊を描きながらも、実際は金剛薩埵以下の菩薩の姿で表現されていたと考えられる。ペンコル・チューデ仏塔でもこれら各尊の尊容は大マンドラと同じ菩薩形で、これを見る限り、マンドラ全体は大マンドラとほとんど違いがない。また各尊の尊容の記述は TAK には含まれていないが、これも大マンドラとの重複を避けたためであろう。TS では出生段に「[諸尊は] 各自のシンボルを両手にしっかり持ち、一切如来に供養し、大マンドラの方法で月輪に住する」とあるが、アーナンダガルバはこれに対しても「金剛杵などの各自のシンボルを両手でしっかり持つ」と説明するだけで、そのシンボルが何であるかは逐一あげていない。

4.1.5 金剛界四印マンダラ (図3, 8, 9)

四印マンダラはアーナンダガルバの場合、五仏それぞれのマンダラがあるため、5種類存在する。ペンコル・チューデ仏塔にも5種の金剛界四印マンダラがあったが、当初の姿を伝えているのは毘盧遮那(図3)と阿閼(図8)の四印マンダラのみである。宝生のマンダラ(図9)は後世、描き直された作品で、阿弥陀と不空成就のマンダラは汚損のため彩色はほとんど残っていない。

四印マンダラに関するTSの記述も簡略で、大マンダラのように輪郭線を引いたあとで「仏のすがた」(buddhabimba)と四つの印を描くよう指示するのみである。具体的な印(シンボル)については「金剛の印など」と述べるにとどまる。マンダラの形態は大マンダラと同じであるため、二重の楼閣がここでも必要となるが、現存の3マンダラのうち、宝生のマンダラは内部の楼閣が描かれていない。修復の際、誤ってはぶかれたのであろう。アーナンダガルバによれば、毘盧遮那の四印マンダラの場合、中尊の毘盧遮那は獅子の台座にすわり、その周囲に薩埵金剛女以下の4尊、すなわち四波羅蜜の四つの印を描く。大マンダラの中央に描かれた5尊が、そのままひとつのマンダラとして独立したことになる。阿閼以下の四仏の四印マンダラは中央にやはり尊形の仏をおき、そのまわりに金剛薩埵以下の菩薩のシンボルを配置する。TSの「仏のすがた」が毘盧遮那のみを指すか、あるいは五仏すべてを指すかは明らかではないが、TSの別の箇所には五仏すべてがそれぞれ四印マンダラを持つことを示唆する一節があり(§592)、アーナンダガルバの五種の四印マンダラもここを典拠とすると考えられている²⁸⁾。アーナンダガルバは四仏の4種の四印マンダラについても、阿閼以下の仏は鳥獣座に乗り、その他の菩薩たちは所定のシンボルで表されると述べ、次のようなシンボルを示す。

表6

| | 阿閼 | 宝生 | 阿弥陀 | 不空成就 |
|---|------|-------|------|------|
| 東 | 金剛杵 | 宝 | 蓮華の印 | 羯摩杵 |
| 南 | 鈎 | 太陽の印 | 剣の印 | 甲冑 |
| 北 | 弓矢 | 金剛幢の印 | 輪の印 | 2本の牙 |
| 西 | 祝福の印 | 歯の列 | 舌の印 | 拳の印 |

※TAK237.1.1-2.5による。

28) 乾 [1995: 10-11] は、四印マンダラの説明の直前のTSの内容から、「仏の姿」は毘盧遮那で、「金剛印」は四波羅蜜のシンボルを指すと考える。5種の四印マンダラの典拠については田中 [1988: 11] 乾 [1995: 2] に指摘されている。

現存する毘盧遮那と阿閼の四印マンダラは TAK の記述によく一致するが、後補の宝生マンダラの場合、周田のシンボルはいずれもこれらと異なるものが描かれている²⁹⁾。中央の宝生如来も身色、印、台座等、図像上の特徴は文献の規定に一致しない。

4.1.6 金剛界一印マンダラ (図24)

金剛界一印マンダラは金剛薩埵のみを中央に描いたマンダラである。ペンコル・チューデ仏塔では東室の正面の壁の向かって左上に描かれる。マンダラの下半分は塗り直されているため、原型を伝えるのは全体の半分であるが、この部分にも一部、後世の絵師の手がくわえられている。

TS の一印マンダラに関する規定は、マンダラ全体は大マンダラのように輪郭線を引き、そこの月輪の中に金剛薩埵を描くというだけにとどまる。マンダラの形態は大マンダラと同じであるため、やはり二重の楼閣を持ち、内部には金剛杵の円と柱が描かれる。日本の九会の金剛界マンダラの場合、一印マンダラ (一印会) には金剛薩埵ではなく毘盧遮那1尊がおかれ、毘盧遮那をおさめた月輪は楼閣の壁に接している。TS の記述にはペンコルの作例の方がより忠実である³⁰⁾。

4.2 降三世品

4.2.1 降三世大マンダラ (図19, 20)

TS の第二品である降三世品は金剛部のマンダラである。中心におかれる尊格は金剛界品と同じ毘盧遮那で、尊容も金剛界品と変わりはないが、それ以外の尊格はすべて忿怒形となる。四仏の位置には金剛部固有の尊格が現れ、十六大菩薩も「忿怒」という語を付した名称に変わる。さらに大マンダラには外金剛部の尊格、すなわちヒンドゥー教の神々がマンダラの周囲に配される。

ペンコル・チューデ仏塔の降三世大マンダラは汚損や亀裂もなく、制作時当初の美しさを今も残している。全体が二重の楼閣からなる構造は金剛界品のマンダラと同じであるが、内側の楼閣にここではトーラナが描かれる。TS に含まれるマンダラの形態に関する規定は、外側の楼閣については金剛界大マンダラのそれとまったく同じで

29) 東が金剛杵、南が宝、西が蓮華、北が羯摩杵のように見える。毘盧遮那の四印マンダラを模したものか。

30) 現図曼荼羅の一印会に金剛薩埵ではなく毘盧遮那がおかれることの原因については梶尾 [1927: 323-325] に示されている。わが国に伝わる金剛界マンダラでも「五部心観」では金剛薩埵が一印会の尊格として描かれている。

あるが、内側の楼閣については「金剛宝で飾られ、四角と四門をそなえ、八柱とトーラナをとまなう」とのべる。外側の楼閣と同じく四角で四門、さらにトーラナが内側の楼閣にも含まれていることが明示されている³¹⁾。楼閣の内部の構造は金剛界大マンダラと同様で、五仏を中心とした5つの区画に金剛杵をデザインした円を描き、さらにそれぞれの円の中に5つの月輪をおくことをアーナンダガルバは述べる。これはTS本文の「金剛の柱のすぐれたところに5つのマンダラを置く」という一節を根拠とする。

降三世品のマンダラに描く尊格について、TS本文はまず、マンダラの中央に「仏のすがた」を、そして、その四方に金剛杵、宝、蓮華、さまざまな武器 (*viśvāyudha*) を置くこと述べる。中尊の名称は示されていないが毘盧遮那を示し、四方の金剛杵などは四波羅蜜を示すシンボルである。つづいて東から、金剛手 *Vajrapāṇi*、金剛灌頂 *Vajrabhīṣeka*、金剛軍 *Vajrasena*、金剛遍入 *Vajrāveśa* を四方のマンダラの中央に置き、その周囲を忿怒の金剛尊 (*vajrakrodha*) が取り囲むとする。また内の四供養菩薩が位置した四隅には秘密の供養女 (*guhyapūjā*) を金剛界マンダラのように描き、外の四供養菩薩として供養の女神 (*pūjādevī*) を、さらに四門には鉤 (*aṅkuśa*) を描くよう指示する。降三世品に固有の尊である外金剛部については「外のマンダラのところを外金剛部を[描け]」とする。いずれの尊格も具体的な尊容はあげられていないが、例外的に東に位置する金剛手は「わずかに牙をむき、忿怒と笑いの表情を浮かべ、展左の姿勢で立つ。炎の輪で輝く。左足は大自在天を、右足ではウマーの胸を踏みつけて描け」とくわしく描写する。また「金剛フーンカーラの姿をとる」とも述べる。ヒンドゥー教の至高神大自在天とその妻ウマーを踏みつける忿怒の姿がTSにも明瞭に示されている。

アーナンダガルバは毘盧遮那から外金剛部に至るまで各尊の尊容をTAKの中で説明している。毘盧遮那は金剛界品と同じ尊容で、四面をそなえ、最上菩提印を両手で結び、金剛杵を持つ。獅子の座に乗ることも明記されている。金剛手についてはTSの記述にくわえ、象の台座の上に立つこと、両手で降三世印を結ぶこと、そして足の下の大自在天は右手に三鉤杵、左手に三叉戟を、同様にウマーも金剛杵と三叉戟を持

31) 金剛界大マンダラとの形態的な違いはトーラナの有無だけであるが、TS本文の記述は、降三世品の場合、あきらかに外の楼閣と同じ形の内側の楼閣が存在するのに対し、金剛界品の場合、内の都城は「輪のような形」と規定され、それが四角い楼閣であったとは断言できない。むしろ「輪」(*cakra*) という語は常識的には円形を示し、TSの段階では金剛界品のマンダラは二重の楼閣から構成されたマンダラではなく、円形の都城を内部に含む形態をしていたと考えた方が自然である。金剛界マンダラでも二重の四角い楼閣をTSも説いていることを主張するために、アーナンダガルバが独自の解釈を示していることについてはすでにふれた。

つことなどが言及されている。金剛灌頂以下の尊格は金剛界品では宝生以下の三尊の仏の位置に置かれるが、アーナンダガルバは金剛軍はクマラ (*Kumāra, Tib. gZhon nu) の姿で、金剛遍入は金剛業の姿でそれぞれ描けとする。金剛灌頂についての尊容への言及はない。身色は順に黄色、赤白色、雑色で、金剛界品の各方角の第1の菩薩、金剛宝、金剛法、金剛業の身色に一致する。また、アーナンダガルバは「金剛灌頂」などの尊名よりも「金剛フーンカーラ」にならって作られた「宝フーンカーラ」「法フーンカーラ」「羯摩フーンカーラ」という名称を好んで用いる。

これら四尊の周囲に配される16尊の金剛忿怒尊は、その名のとおりに「忿怒」(krodha) の語を各自の尊名に含んでいる (§ 871-880)。アーナンダガルバはこれら16尊の身色を規定したあと、いずれも展左で立ち、左手は期劫印を示し、右手は自分のシンボルを持つことを述べる。展左という姿勢は毘盧遮那をのぞくすべての尊格にも適用され、二重のマンダラの間には描かれる賢劫千仏も同じ姿勢をとる³²⁾。八供養菩薩と四摂菩薩は金剛界マンダラと同じ持物を持ち、賢劫千仏も東の249尊は光輝く五鈷杵、南は金剛宝、西は金剛蓮華、北は羯摩杵を手にする。

外金剛部の神々は右手は三叉戟、左手には各自のシンボルを持つことをアーナンダガルバは述べ、TAK の中で各尊のくわしい尊容を示している³³⁾。これらの神々は仏教に帰依することによって仏教徒としての名、すなわち灌頂名を得る。外金剛部の神々とその配偶神の本来の名称と灌頂名はTSによれば以下の通りである。

表7

| | サンスクリット | 灌頂名 | | サンスクリット | 灌頂名 |
|------|---------------|--------------|-------|--------------|----------------|
| 三界主 | | | 三界主后 | | |
| 大自在天 | Maheśvara | Krodhavajra | 烏摩后 | Umā | Krodhavarjāgni |
| 那羅延天 | Nārāyaṇa | Māyāvajra | 銀色天后 | Rukmiṇī | Vajrahemā |
| 俱摩羅天 | Sanatkumāra | Vajraghaṇṭa | 沙瑟恥天后 | Śaṣṭhī | Vajrakaumārī |
| 梵天 | Brahmā | Maunavajra | 梵天后 | Brahmāṇī | Vajraśānti |
| 帝釈天 | Indra | Vajrāyudha | 帝釈后 | Indrāṇī | Vajramuṣṭī |
| 飛行天 | | | 飛行天后 | | |
| 日天 | Amṛtakuṇḍalin | Vajrakuṇḍali | 甘露母 | Amṛtā | Vajrāmṛtā |
| 月天 | Indu | Vajraprabha | 嚕呬尼母 | Rohiṇī | Vajrakānti |
| 彗星天 | Mahādaṇḍāgri | Vajradaṇḍa | 持杖母 | Daṇḍadhāriṇī | Vajradaṇḍāgri |

32) 賢劫尊についてはTSには言及がなく、本来描かれていたかは不明である。賢劫尊は仏部のマンダラに固有の尊格であり、金剛界品以外のマンダラには本来は描かれなかったという見解が乾 [1995, 1996a, 1996b] に示されている。

33) TAK254.4.1-255.2.8

| | | | | | |
|-------|------------|---------------|--------|------------|--------------|
| 癸惑天 | Piṅgala | Vajrapīṅgara | 惹多訶哩尼母 | Jātahārīnī | Vajramekhalā |
| 虚空天 | | | 虚空天后 | | |
| 金剛摧天 | Madhumatta | Vajraśaunda | 摩哩尼母 | Māraṇī | Vajravilayā |
| 金剛食天 | Madhukara | Vajramāla | 吞伏母 | Āśanā | Vajrāśanā |
| 金剛衣天 | Jaya | Vajravaśī | 囉舍那母 | Vasanā | Vajravasanā |
| 調伏天 | Jayāvaha | Vijayavajra | 那囉爹母 | Ratī | Vajravaśā |
| 地居天 | | | 地居天后 | | |
| 羅刹天 | Kośapāla | Vajramusala | 寂靜母 | Śivā | Vajradūtī |
| 風天 | Vāyu | Vajrānila | 風母 | Vāyavī | Vegavajriṇī |
| 火天 | Agni | Vajrānala | 火母 | Āgneyā | Vajrajvālā |
| 毘沙門天 | Kubera | Vajrabhairava | 俱尾梨母 | Kauberī | Vajravikaṭā |
| 水居天 | | | 水居天后 | | |
| 金剛門天 | Varāha | Vajrāṅkuśa | 囉囉曳 | Vārāhī | Vajramukhī |
| 炎摩天 | Yama | Vajrakāla | 左捫尼 | Cāmuṅḍā | Vajrakālī |
| 毘那夜迦天 | Prṭhivi | Vajravīṇāyaka | 親那那婆 | Cinnanāsā | Vajrapūtanā |
| 水天 | Varuṇa | Nāgavajra | 水母 | Vāruṇī | Vajramakarā |

※サンスクリット名は TS § 746-758, 761-770 による。

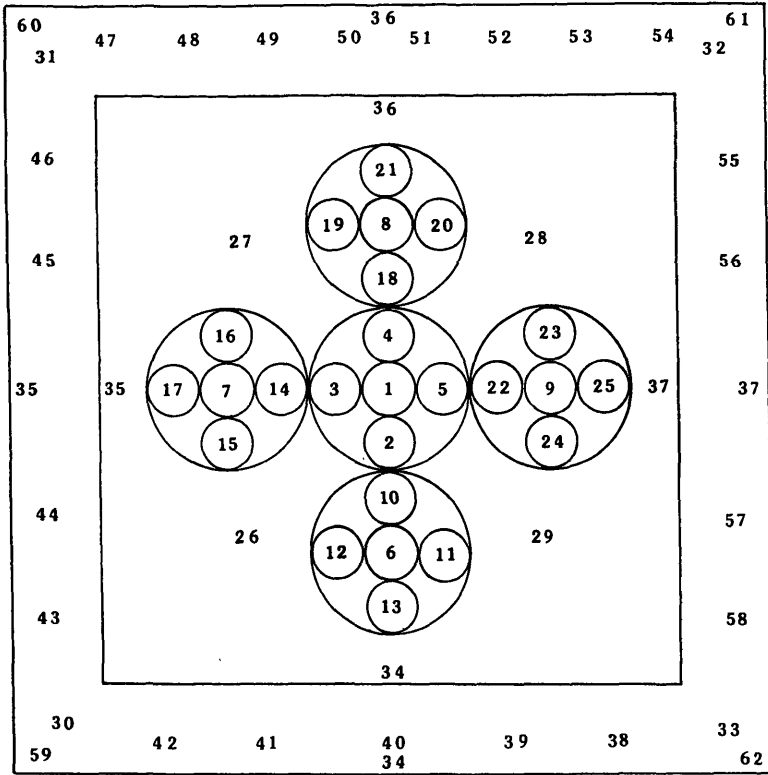
これらの外金剛部の神々はマンダラの楼閣の最も外側の部分、すなわち賢劫千仏の外側で、楼閣の壁面にそった部分に置かれる。配置方法は東に三界主、南に飛行天、西に虚空天と地居天、北に地下天となり、東に5尊、西に8尊、それ以外は4尊と不規則な数になる。いずれも男神と女神が一組になるので、42の神々がこの部分に描かれている。

アーナンダガルバによる降三世大マンダラには、TS 本文には規定されていない尊格のグループが二つ登場する。ひとつは八供養菩薩の周囲にそれぞれ四尊ずつ置かれる供養菩薩の眷属で³⁴⁾、もうひとつのグループは外の四供養菩薩のさらに外側に描かれるビーマー以下の4人のヒンドゥー教の女神である。後者の4尊はTSの降三世品の大マンダラの章では言及されていないが、降三世品の後半部分である教勅分の三昧耶マンダラの中で名称があげられている。アーナンダガルバはTAKの降三世大マンダラの中でこれら4尊の尊容を外金剛部の神々につづいて説明する³⁵⁾。

降三世大マンダラのマンダラの見取り図と諸尊の位置を以下に示す(挿図4)。

34) アーナンダガルバはTAKの大マンダラの解説部分で以下のような名称をあげる(TAK256.3.3-6)。Gar dkrol brdung ba'i lha mo (嬉), rNga zlum ba rdung po (鬘), Gling bu ma (歌), rNga rked nyag brdung ba (舞), Zang dud 'dud pa (香), rNga bo che brdung ba (華), rNga dra ba can brdung ba (燈), rNga 'da' ka ba brdung ba (笑)。これらに対応するサンスクリット名は不明であるが、いずれも楽器の種類であろう。

35) TAK254.1.1-2; 255.2.5-8.



挿図4 降三世大マンダラ諸尊配置図

表8

| | | | | | | | |
|-----|------|-------|-------|-------|-----|----|----------|
| 1 | 毘盧遮那 | 9 | 金剛遍入 | 38-42 | 三界主 | 59 | ビーマー |
| 2-5 | 四波羅蜜 | 10-25 | 金剛忿怒尊 | 43-46 | 飛行天 | 60 | シュリー |
| 6 | 金剛手 | 26-29 | 内四供 | 47-50 | 地居天 | 61 | サラスヴァティー |
| 7 | 金剛灌頂 | 30-33 | 外四供 | 51-54 | 水居天 | 62 | ドゥルガー |
| 8 | 金剛軍 | 34-37 | 四摂 | 55-58 | 虚空天 | | |

4.2.2 降三世品三昧耶マンダラ (図14~16)

金剛界品と同様、降三世品においてもすべてのマンダラの形態は大マンダラが基準になる。TSには「大マンダラにしたがって輪郭線を引け」という定型化した文章が現れ、具体的な形態は説かれない。同一の文章が三昧耶マンダラ以下の5つのマンダラすべてに登場する。三昧耶マンダラの場合、まずその中に含まれる5つの「マンダラ」すなわち中央と四方の円に「秘密の印」(guhya mudrā)を置く。「秘密」という語が三昧耶マンダラ固有のキーワードであることも金剛界品と同様である。しかし、

中央のみは「秘密の印」ではなく「仏のすがた」を描くと規定され、毘盧遮那を尊形で描くことが知られる。金剛界三昧耶マンダラでは毘盧遮那も仏塔というシンボルを用いて表現されたが、これは金剛界品と遍調伏品の場合で、降三世品と一切義成就品では毘盧遮那のみ尊形で表現する。

四波羅蜜のシンボルについては「忿怒の三昧耶」(krodhasamaya)とTSの中では表現されている。アーナンダガルバはこれに対し、金剛杵、宝、蓮華、羯摩杵というシンボル名をあげている。ペンコル・チューデ仏塔の遺例では、金剛界大マンダラの四波羅蜜のシンボルとは形態が若干異なり、次に説明される金剛手などの四方の尊のシンボルと同じものが描かれている。

金剛手以下の四方の4尊と、その周囲に置かれる16尊は、いずれも具体的なシンボルがTSの中で規定されている。ここでも金剛界品と同様、アーナンダガルバはよりくわしい説明を多くのシンボルにくわえている。両者を以下に示そう。

表9

| 尊名 | TS | TAK |
|------|---------------|---|
| 金剛手 | 横にした三叉戟の上に金剛杵 | 右を向いた三叉戟の上に輝く金剛杵 |
| 金剛灌頂 | 金剛宝 | 八輻輪で、中央に五鈷杵をつけた如意宝を載せる |
| 金剛軍 | 金剛蓮華 | 八葉蓮華の中央に16弁の金剛〔蓮華〕 |
| 金剛遍入 | 横にした金剛杵に金剛杵 | 東に先端を向けた三鈷杵を描き、その上に羯摩杵を置き、さらに周囲を微細金剛が囲む |
| 薩 | 金剛杵 | 燃える五鈷杵 |
| 王 | 金剛鈎 | 金剛の鈎 |
| 愛 | 矢 | 金剛の矢 |
| 喜 | 歡喜 | 拳の印 |
| 宝 | しかめた眉の中央に金剛杵 | しかめた眉をつけた顔で、中央に金剛宝 |
| 光 | 日輪に金剛杵 | 太陽を描き、中央に五鈷杵 |
| 幢 | 幢 | 日輪の上に如意宝幢の印 |
| 笑 | 金剛杵に齒列 | 燃える金剛杵を両端につけた2列の齒 |
| 法 | 炎の中の蓮華 | 16弁の金剛蓮華 |
| 利 | 劍 | 金剛劍 |
| 因 | 輪 | 〔輻が〕独鈷のような八輻輪 |
| 語 | 金剛の舌 | 金剛の舌 |
| 業 | すべての金剛杵 | 羯摩杵 |
| 護 | よい甲冑 | 金剛の甲冑 |
| 牙 | 金剛の牙 | 二つの金剛の牙 |
| 拳 | よい拳 | 金剛界で説かれた拳で握られた五鈷杵 |

※TS § 999-1006, TAK268.1.6-268.2.6 による。

このうち、はじめの金剛手のシンボルの一部として描かれる戟は、金剛手自身ではなく、その足元に横たわる大自在天を象徴する。その上に乗る金剛杵が金剛手を示す。ただしペンコル・チューデ仏塔では金剛手に相当するところには金剛杵は表現されているが、戟は描かれていない。

その他の尊格について、TSは「定められた方法で描け」と述べるにとどまり、具体的なシンボルをあげていない。アーナンダガルバは八供養菩薩については金剛界の三昧耶マンダラと同じであることを示し、降三世品にのみ見られる周囲の四尊の眷属に関してのみシンボル名に言及する。また四摂菩薩と賢劫尊については鈎などのシンボルを逐一あげるが、いずれも金剛界三昧耶マンダラと同じで、降三世大マンダラの各尊の持物とも一致する。

なお、降三世大マンダラでマンダラのもっとも外側に描かれた外金剛部の神々については、TSは何もふれていない。アーナンダガルバは外金剛部の神々自身のマンダラは後述されるので、ここには描かないとする。三世輪のマンダラを指すのであろう。ペンコル・チューデでも外金剛部は三昧耶マンダラ以下の降三世品の5つのマンダラには描かれていない。

4.2.3 降三世品法マンダラ (図17)

降三世品法マンダラも、金剛界品の同種のマンダラと同様、すべての尊格は三昧に入った姿で描かれ、胸には各自の印を保つ。中尊については、TSでは「智慧の金剛の中に仏を描く」と述べ、背景に金剛杵を描くよう指示する。四波羅蜜はここでもシンボルで描かれ、TSはそれを単に「印」(mudrā)と呼んでいる。残りの尊については「規定どおりに」描くと述べるにとどまる。金剛界品のように「各自の印」を置くなどの記述は見られないが、金剛界品の規定にしたがうことを念頭に置いているのであろう。

アーナンダガルバは中央の毘盧遮那については「獅子の台座の上に輝く金剛杵を横たえ、その上に三昧に入った毘盧遮那を、心臓の外に微細金剛杵を置いて描く」と注記する。また、四波羅蜜についても「金剛、宝、法、羯摩の金剛の印を描く」と具体的にあげる。「法の金剛」は金剛の蓮華を指す。それ以外の尊格については「持金剛 Vajradhara 以下はみな三昧に入り、胸には各自の印を保ち、智慧の金剛杵の中央に入っている」と、やはり毘盧遮那と同じように表現されることを示す。ここで「持金剛」と呼ばれているのは東の金剛手のことである。この規定はマンダラのすべての尊格におよぶと考えられるが、個々の尊格の具体的なシンボル名はあげられていない。

三昧耶マンダラのシンボルと一致するのであろう。また外金剛部はこのマンダラにも含まれない。

なお、ペンコル・チューデの遺例では、いずれの尊も定印を結び、三昧に入った姿で描かれているが、東の金剛手のみが多臂で表現されている。降三世大マンダラでも金剛手は八臂をそなえ、類似の尊容は後の一印マンダラにおいても言及されている。この法マンダラでも、二臂は定印を結ぶが、残りの六臂は体の左右に広げられている。

4.2.4 降三世品羯摩マンダラ (図59, 60)

降三世品のこれまでの三種のマンダラは、すべて東室に描かれていたが、羯摩マンダラは西室の北面に描かれている。すでに述べたように、このマンダラがおそらく後世の絵師の手による描き直しであることは、各尊の様式や装飾モチーフの表現方法が、他のマンダラと異なることから明らかである。内側のマンダラに描かれる「金剛の柱」に、金剛杵ではなく、蓮華の文様が現れるのも、儀軌を知らない絵師によって描かれたためであろう。

羯摩マンダラに関して TS 本文は、毘盧遮那のところには「仏のすがた」を、その四方の四波羅蜜には「最高の三昧耶」を、そして四方輪には「金剛の主」などの四尊と16の忿怒尊に相当する「摩訶薩女」(mahāsattvī)を描くよう指示する。「金剛の主」は金剛手を指している。16尊が「摩訶薩女」と呼ばれているのは、羯摩マンダラが供養と結びついたマンダラで、金剛界品でも見られたように、16尊が女尊として機能するためである。

アーナンダガルバの注釈はあまりくわしいものではなく、金剛界品と同じように、基本的には大マンダラの尊形を踏襲して描かれたと考えられるが、ペンコル・チューデの作品はオリジナルの姿を伝えていないため、大マンダラと比較することはできない。

4.2.5 降三世品四印マンダラ (図21, 22)

現在、ペンコル・チューデ仏塔には、毘盧遮那 (図21) と金剛フーンカーラ (図22) の2種の降三世品四印マンダラが残されている。TS ではマンダラの形態は、やはり大マンダラにしたがうと規定されているが、これら2種の作例では、内側の楼閣にはトーラナが表現されていない。アーナンダガルバの注釈でもこれについては特別ふれられていないため、その根拠は明らかではない。ペンコル・チューデでは四印マンダラと一印マンダラでは楼閣の装飾が簡略化される傾向があるため、トーラナも省略さ

れたのかもしれない。

マンダラの尊格については TS は「降三世などを仏の周囲に描け」とのみ記す。金剛界品では毘盧遮那の周囲には四波羅蜜を象徴するシンボルがおかれたが、ここでは、四波羅蜜にかわって、降三世尊、すなわち金剛手をはじめとする四方の4尊が描かれる。アーナンダガルバはこの部分に注釈をくわえて、中央には大マンダラで説いた姿で毘盧遮那を描き、金剛フーンカーラ（金剛手を指す）のところには、象の座の上に横向きに三叉戟をおき、その上に五鈷杵を描くよう指示する。他の3尊についても、鳥獣座とその上のシンボルがあげられるが、いずれのシンボルも三昧耶マンダラで示された三昧耶と同じであることを、アーナンダガルバは明記している。ベンコル・チューデにおいてもこの規定どおりに各尊が表現されている。

TS には他の4種のマンダラへの言及はないが、ベンコル・チューデでは大マンダラの右上に金剛フーンカーラの四印マンダラが描かれている³⁶⁾。中央に弓矢などを持つ金剛フーンカーラが描かれ、四方にはやはり三昧耶マンダラで示された周囲の忿怒尊のシンボルがおかれている。

4.2.6 降三世品一印マンダラ

ベンコル・チューデ仏塔には降三世品の一印マンダラは残されていない。TS によれば、持金剛の月輪を描き、そこに展左の姿勢をとる金剛フーンカーラの大印 (mahāmudrā)、すなわち尊形を描く。TAK には尊容の記述もあり、「青い睡蓮の色で、仏の輪によって飾られる³⁷⁾。わずかに牙をむき、四面八臂をそなえ、光輝く。展左で立ち、[左足で] 大自在天を [踏み]、右足はウマーの胸の上におくように描く。[これら2神は] 一面二臂で描く」と述べられている。

36) アーナンダガルバの場合、四大品のいずれにおいても5種の四印マンダラが説かれているが、他の4種の四印マンダラに言及する金剛界品は別にして、TS が5種の四印マンダラを降三世品以下でも説いていたかは不明である。金剛界品では毘盧遮那の周囲は四波羅蜜であったが、降三世品以下では毘盧遮那と四方輪の中央の4尊との組み合わせにかわる。四印マンダラが大マンダラを簡略化したマンダラであることを考えれば、さらに四方輪の中央の尊と十六大菩薩を組み合わせた4種の四印マンダラを必要とするのは不自然に感じられる。四印マンダラを構成する尊格が金剛界品と他の三大品との間で異なることは、TS の中で、両者の間でシステムに若干の不整合があったことを示唆している。TS の成立を考慮に入れば、最初期に成立した金剛界品と、それにくわえられた他の三大品との間に何らかの不一致があることはじゅうぶん予想される。類似の不整合としては、一印マンダラに選ばれる尊格が、金剛界品では金剛薩埵であるのに対し、他の三大品では東方輪の中心の尊にかわることもあげられるであろう。

37) 降三世が仏の輪を飾るという特徴は、インドから出土した降三世の作例には広く認められる [森 1990: 72]。

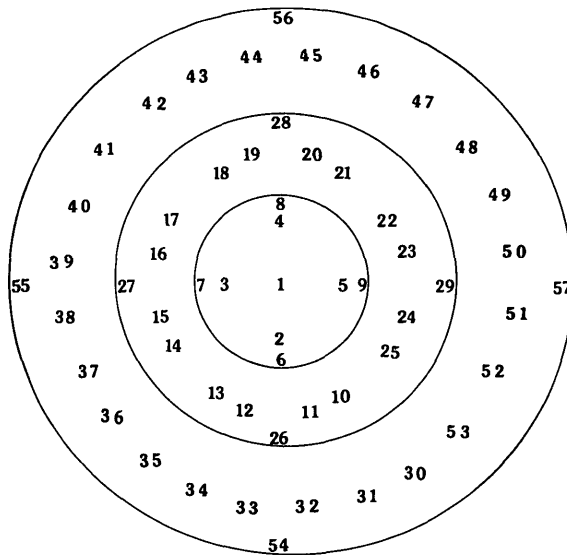
4.2.7 三世輪大マンダラ (図 2, 5)

ペンコル・チューデ仏塔の東室西面には三世輪の4種のマンダラがすべて描かれている。このうち大マンダラは西面の向かって右下にある。三重の同心円構造を持ち、いずれの円も楼閣の外壁と同じ装飾がほどこされていることから、円形の楼閣が表現されていることがわかる。四方には四門がおかれる。中央の楼閣の内部には、これまで見てきた金剛界品や降三世品の内部と同様、金剛の柱を井桁に組んだ金剛の円がおかれる。ただしそこにおかれる尊格の数は、中央と四方の区画に1尊ずつ合計5尊である。初重と第二重の間には16の、その外の二重と三重の間には24の神々の姿が描かれている。三重の楼閣の四門にはそれぞれ門衛の姿も認められる。

TS 本文にはこのマンダラはどのように説明されているだろうか。まず、全体の形は「法輪のようにすべてのマンダラの線を引け。中央のマンダラの2倍、3倍の線を[さらに]引け」と述べられ、輪に似た三重の同心円構造であることがわかる。ペンコルでは初重と第二重、第二重と第三重のそれぞれの間、対角線にそって輪の輻が表現されている。ちょうど色が塗り分けられる部分に相当する。TSの「法輪のように」という記述に忠実にしたがったものであろう。諸尊の配置については、中央に毘盧遮那、四方に摩訶薩を置けと述べる。4尊の摩訶薩は金剛フーンカーラ以下の四方輪の中尊である。TSはさらに「第1のマンダラ」に外金剛部の三界主、「第2のマンダラ」に飛行天、同様に第3には地居天、第4には地下天をおき、四門に虚空天を置くよう指示する。このうち第1から第4のマンダラは、第二重の四方と理解される。また四門は同じ第2重の四門を指す。TSは第三重を指して「外輪」と呼び、ここに母天を置くことを述べる。そして「すべての門」には門衛が置かれる。最後の「すべての門」がどの門を指すかは明らかではないが、すでに第二重の門には虚空天が描かれているので、初重と第三重のそれぞれ四門を指すとも考えられる。アーナンダガルバはすべての門に配される「門衛」については、金剛鉤以下の四摂を描くよう TAKの中で指示するので、初重と第三重にこの4尊が2度、登場することになる。

TSの規定でマンダラに登場する神々とその配置法は明らかとなったが、第三重の母天についてはペンコルのマンダラでは24の神々が描かれ、母天二十天では不足する。また四方に6尊ずつ均等に配分するため、どの神がどこに置かれるのか明らかではない。アーナンダガルバは TAKの中で母天のメンバーとその配列を明確にしている。それによれば、第三重には二十天后の他に、ビーマー以下の4人の女神がくわえられる。各方角の6尊は、これら4人の女神と虚空天后の4尊をそれぞれ一方に1尊ずつ分け、これに他の4つのグループの4尊と組み合わせて構成される。東の場合、ド

ウルガー、三界主の第1の神、第2の神、虚空天の第1の神、三界主の第3の神、第4の神という順序になる。以下の3方向では、はじめが西から順にビーマー、シュリー、サラスヴァティーになり、それぞれ4番目に登場する神に虚空天の第2、第3、第4の神が配分される。この神をはさんで、前後に南は飛行天、西は地居天、北は地下天が2神ずつ分けられている。ベンコルでもこの順序で北東の隅から24の女神がならぶ。マンダラ全体の諸尊の配置は次の通りである（挿図5）。



挿図5 三世輪大マンダラ諸尊配置図

表10

| | | | | | | | |
|-------|------|-------|-------|----|--------|-------|----------|
| 1 | 毘盧遮那 | 22-25 | 水居天 | 37 | 甘露母 | 46 | 火母 |
| 2 | 金剛手 | 26-29 | 虚空天 | 38 | 嚕哩尼母 | 47 | 俱尾梨母 |
| 3 | 金剛灌頂 | 30 | ドゥルガー | 39 | 吞伏母 | 48 | サラスヴァティー |
| 4 | 金剛軍 | 31 | 銀色天后 | 40 | 持杖母 | 49 | 囉囉曳 |
| 5 | 金剛遍入 | 32 | 沙瑟恥天后 | 41 | 惹多訶哩尼母 | 50 | 左捫尼 |
| 6-9 | 四摂 | 33 | 摩哩尼母 | 42 | シュリー | 51 | 那羅爹母 |
| 10-13 | 三界主* | 34 | 梵天后 | 43 | 寂静母 | 52 | 親那那婆 |
| 14-17 | 飛行天 | 35 | 帝釈后 | 44 | 風母 | 53 | 水母 |
| 18-21 | 地居天 | 36 | ビーマー | 45 | 囉舍那母 | 54-57 | 四摂 |

*大自在天をのぞく。以下の3マンダラでも同様

各尊の尊容については、いずれも降三世大マンダラで説いた姿で描くとアーナンダガルバは指示し、繰り返して説明しない。また外金剛部の上首である大自在天とその

妻ウマーは第二重、第三重には登場しない。初重の東に置かれる金剛手の足の下にすでに描かれているからである。

4.2.8 三世輪三昧耶マンダラ（図4）

三世輪の第2のマンダラは「金剛マンダラ」とTSの中では呼ばれているが、他の四大品の三昧耶マンダラに相当する。しかし、ペンコル・チューデの該当のマンダラを見ると、毘盧遮那以外のすべての尊をシンボルで描くこれらの三昧耶マンダラと異なり、尊形で表される尊も含まれる。また、マンダラの形態自体もこれまで見てきたものや、直前の大マンダラに比べてかなり様相が異なる。

TSによれば、このマンダラは二重の四角のマンダラで、外側のマンダラは北に、内側のマンダラの東に限り、門がある。ペンコルの遺例でもこれは忠実に再現され、それぞれ1方向にのみ門が描かれている。外側のマンダラの場合、門のない3方向にはトーラナの置かれる位置に傘蓋が飾られ、そのまわりに羯摩杵の鉤が表現される。通常トーラナによって隠される中央の鉤まで表現されていて興味深い。

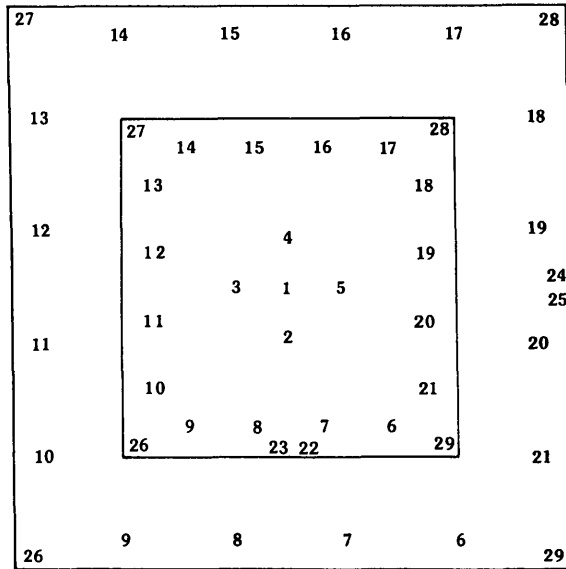
マンダラを構成する尊格とその配置については、TSの記述である程度予想できるが、ペンコル・チューデの作例を理解するためにはアーナンダガルバの注釈が必要である。TSはまず中央に「仏のすがた」を、そしてすべての方角、すなわち四方には降三世以下の4尊を置くことを述べる。アーナンダガルバは毘盧遮那は大マンダラの姿で描き、四方の尊については象などの鳥獣座を置き、その上に降三世品の陀羅尼マンダラ（三昧耶マンダラ）で説いたシンボルを置くと述べる。次にTSは「マンダラのすぐれたところ」に「金剛の印」(vajramudrā)を描き、その「すべての方角」に部族の印を置くとする。これはペンコルでは、内側のマンダラの四方にひとつずつ描かれた金剛杵と、その左右に置かれた虚空天をのぞく五類諸天のシンボルに相当する。この部分もアーナンダガルバの注釈を見ると、「金剛杵の印」は輝く金剛杵であると解釈し、四方の中央に描くよう指示する。そして、その右と左に金剛幻以下のシンボルを描けと述べる。金剛幻は三界主のはじめの神ナーラーヤナの灌頂名で、このあと、アーナンダガルバは五類諸天の灌頂名を用いて各尊の位置を示す。また、それぞれに用いられるシンボルもTAKの中で言及する。

五類諸天の残り四尊の虚空天は、TSによれば門に配置される。アーナンダガルバは虚空天の4尊を内側の初重の東門に二尊、外側のマンダラの北門に二尊ずつ置くよう指示する。内側のマンダラにはこのほか四隅に女神が配される。TSはビーマー、シュリー、サラスヴァティー、ドゥルガーの4神の名称をすべてあげ、南東の隅から

順に四隅に置くよう述べる。降三世品のマンドラにアーナンダガルバがくわえた4人の女神の名称が、TS ではここではじめて示される。同じ4女神を象徴するシンボルが、外側のマンドラにも同じ四隅に描かれる。これも TS 本文に指示されているが、具体的な名称はあげられていない³⁸⁾。

外側のマンドラの四方に4尊ずつ描かれる尊格については「外側にはすべての女神を描け」という規定が TS には含まれる³⁹⁾。アーナンダガルバは同じ文章を TAK の中に引用するが、続けて、東に三界主、南に飛行天、西に地居天、北に地下天を描くよう述べる。内側のマンドラに描かれるシンボルに対応する尊格が尊形で描かれるのである。アーナンダガルバはこのあと、個々の神々の名称をあげているので、誤訳やテキストの誤りではなく、意図的に女神にかえて男神をこの部分に配置することがわかる。

TS と TAK の記述にしたがった各尊の配列を以下に示す (挿図6)。



挿図6 三世輪三昧耶マンドラ諸尊配置図

38) アーナンダガルバによれば、4神のシンボルは、ビーマーから順に剣、蓮華、ヴィーナー、パティサ (Tib. pa ti sa, 詳細不明) である。

39) ただし、この文章はチベット訳、漢訳には含まれるが、サンスクリット・テキストには含まれない [乾 1996b]。

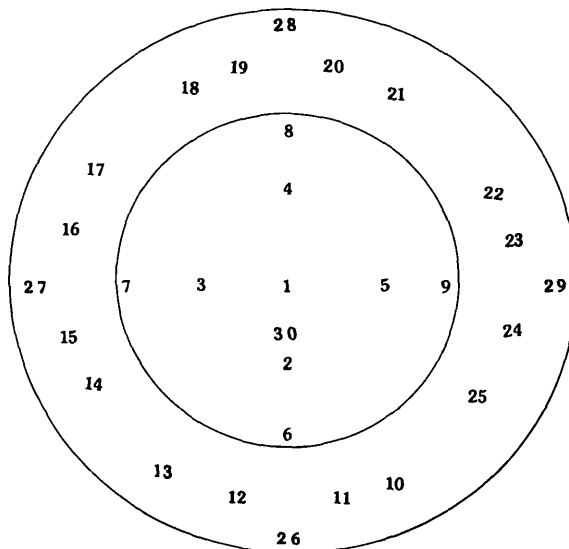
表11

| | | | | | | | |
|---|------|-------|------|-------|------|----|----------|
| 1 | 毘盧遮那 | 5 | 金剛遍入 | 18-21 | 水居天 | 28 | サラスヴァティー |
| 2 | 金剛手 | 6-9 | 三界主 | 22-25 | 虚空天 | 29 | ドゥルガー |
| 3 | 金剛灌頂 | 10-13 | 飛行天 | 26 | ビーマー | | |
| 4 | 金剛軍 | 14-17 | 地居天 | 27 | ジュリー | | |

4.2.9 三世輪法マンダラ (図26)

外金剛部の第3のマンダラには「法三昧耶マンダラ」あるいは「大三昧耶マンダラ」という名称が TS には示されているが、他の四大品の法マンダラに相当する。ペンコル・チューデ仏塔の作例を見れば、各尊は禅定の姿で描かれ、胸にはシンボルを置くという法マンダラ固有の表現方法がとられていることがわかる。

マンダラの形態は三世輪大マンダラの3層からなる円形の楼閣から第三重の楼閣をのぞいた姿である。TS は「三世輪 [マンダラ] のように」描けと指示し、これに対してアーナンダガルバは「三世輪大マンダラと同じであるが二重で描く」と解説する。各尊の尊容については「禅定に入っている仏と持金剛以下を法マンダラの方法で [描き]、胸に [各自の] 標識を描け」と TS に明確に示されている。アーナンダガルバによれば「毘盧遮那からナーガ金剛に至るまで」すべてこの方法で描く。マンダラを構成する尊格は、中央と四方が毘盧遮那と持金剛、すなわち金剛手以下の4尊であることは TS に示されているが、第二重についてはアーナンダガルバのこの記述から五



挿図7 三世輪法マンダラ諸尊配置図

表12

| | | | | | | | |
|---|------|-----|------|-------|-----|-------|------|
| 1 | 毘盧遮那 | 4 | 金剛軍 | 10-13 | 三界主 | 22-25 | 水居天 |
| 2 | 金剛手 | 5 | 金剛遍入 | 14-17 | 飛行天 | 26-29 | 虚空天 |
| 3 | 金剛灌頂 | 6-9 | 四摂 | 18-21 | 地居天 | 30 | 大自在天 |

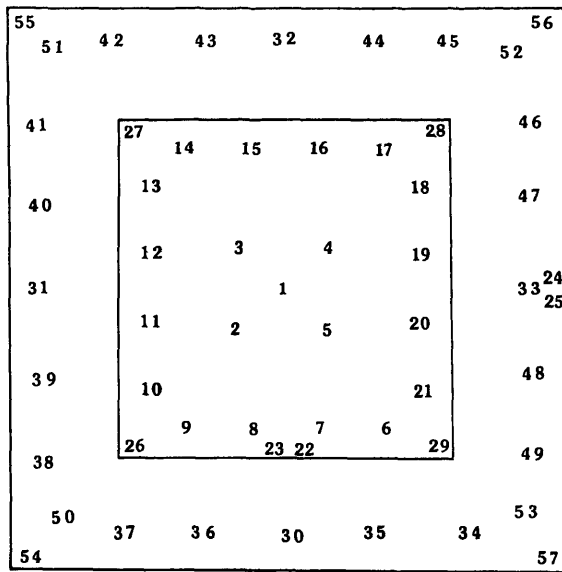
類諸天であることがわかる。大マンダラの配置にしたがうため、東が三界主、南が飛行天、西が地居天、北が地下天に配当される。虚空天は第二重の四門に位置する。これら五類諸天についてはアーナンダガルバも1尊ずつ位置と名称をあげている。アーナンダガルバが「ナーガ金剛まで」と言っているのは、五類諸天の順序にしたがったからで、一番外側の門にナーガ金剛のグループ、すなわち地下天が置かれているわけではない。また、内側の楼閣にも門衛が配されているが、これも大マンダラと同じく四摂菩薩が置かれる。アーナンダガルバは「忿怒金剛鉤」というように、「忿怒」という語をくわえた四摂の名称を列挙している（挿図7）。

なお初重の金剛手の足元に小さく描かれる尊があるが、これは他のマンダラでは金剛手の足の下に踏みつけられる大自在天（灌頂名は金剛最上明）である。「金剛フーンカーラの足元の近くに金剛最上明を正しく描け」とする TAK の記述にしたがっている。

4.2.10 三世輪羯摩マンダラ（図25）

三世輪マンダラの最後に置かれる羯摩マンダラは、形態の上では三世輪三昧耶マンダラに近い。しかし、中尊に毘盧遮那ではなく大自在天とウマーを置き、内側のマンダラには二十天后を中心としたヒンドゥー神が占め、その外のマンダラに金剛手らと十六忿怒尊を置くという独特の配置をとる（挿図8）。

マンダラの形態について TS は「金剛マンダラの方法で線を引け」と述べる。アーナンダガルバは「金剛マンダラ」に注をくわえて、「三世輪陀羅尼マンダラが金剛マンダラである」と説明し、三世輪の三昧耶マンダラと同じ二重の四角で、それぞれひとつずつ門を持つ形態をここでも示している。ペンコル・チューデの作例も三昧耶マンダラに類似するが、外側のマンダラの門のない三方向に置かれていた大きな傘蓋がここでは姿を消している。諸尊の配置については、まず「すべてのすぐれたマンダラは中央に仏がいる。そのまわりには摩訶薩を置け」と規定される。通常、マンダラの尊格の説明は中央の尊から始められるが、この部分は外側のマンダラの説明と理解される。というのは、これにつづいて「[さらに] その中央に、妻をともなる金剛最上



挿図8 三世輪羯摩マンドラ諸尊配置図

表13

| | | | | | | | |
|-------|----------|--------|----------|--------|-------|-------|-------|
| 1 | 大自在天, 烏摩 | 18-21 | 水居天后 | 29, 57 | ドゥルガー | 34-49 | 金剛忿怒尊 |
| 2-5 | 内四供 | 22-25 | 虚空天后 | 30 | 金剛手 | 50-53 | 外四供 |
| 6-9 | 三界主后 | 26, 54 | ピーマー | 31 | 金剛灌頂 | | |
| 10-13 | 飛行天后 | 27, 55 | シュリー | 32 | 金剛軍 | | |
| 14-17 | 地居天后 | 28, 56 | サラスヴァティー | 33 | 金剛遍入 | | |

明そのものを描く」とあるからである。アーナンダガルバは、はじめの規定は外側の楼閣の四辺にあてはめ、各辺の中央に金剛手以下の四尊、その左右に16の忿怒尊を二尊ずつ配することを説明する。マンドラの中央に位置するのは金剛最上明すなわち大自在天とその妻ウマーになるのである。

TS はこれら2神を「金剛嬉などが秘密の舞という供養で供養する」と述べる。内の四供養菩薩に相当する四尊をアーナンダガルバは2神のまわりの四隅に配する。さらにTSは、女神たちが順に「各自の印とそれに対する印で舞をなすように描け」とする。アーナンダガルバによれば、虚空天后をのぞく五類諸天后を示し、彼女らを内側のマンドラの四方に4尊ずつ配する。順序は他のマンドラと同様、東に三界主后、南に飛行天后の順である。また、TS中の「各自の印とそれに対する印」とは、南東の隅から右回りに置かれた8尊（三界主后と飛行天后）と、逆に左回りに置かれた8

尊（地下天后と地居天后）が順に対となり、それぞれ呼応するように舞を踊ると説明する。金剛ヘーマーと金剛マカラーから始まり、金剛アーシャナーと金剛ヴァサナーに至る8組となる。実際にベンコル・チューデではこれらの女神たちは両手を上にあげて、舞踏のしぐさで表現される。舞で供養する女神として、アーナンダガルバはビーマーなどの4人の女神も四隅にくわえる。彼女らも他の女神たちとよく似た姿勢で描かれている。ここに4女神を置くのは三昧耶マンダラと同じである。また、四方には五銚金剛杵がひとつずつ描かれているが、これもすでに三昧耶マンダラに登場した。

最後に TS は隅と門に香などを描くことを述べる。アーナンダガルバは香など、すなわち外の四供養菩薩を外側のマンダラの四隅に割り当てる。さらにビーマーなどの4女神のシンボルを同じ場所に描くよう指示する。門については TS には具体的な尊名が示されていないため、アーナンダガルバは内側のマンダラで五類諸天后からのぞかれた虚空天后を2尊ずつ、内側の東門と外側の北門に配する。三昧耶マンダラで虚空天が同じ位置に置かれていたことに対応する。

4.3 遍調伏品

4.3.1 遍調伏大マンダラ (図43, 44)

遍調伏品は TS の四部の中の蓮華部に相当する。そのため、マンダラのデザインは蓮華のモチーフを基調とし、そこに含まれる尊格も観音を中心とした蓮華部の神々にかわる。これらの尊格のいくつかは、大乘仏教の時代から信仰されてきた観音の眷属や変化観音と同一視される。たとえば、東方輪の中央の尊は世自在 *Lokeśvara* あるいは観音 *Avalokiteśvara* そのもので、この品の名称である「遍調伏 *Jagadvinaya*」とも呼ばれる。南方輪にはブリクティー *Bhṛkuṭī* や十一面観音が、西方輪にはターラー *Tārā* がそれぞれ含まれる。四摂に相当する門衛には馬頭 *Hayagrīva* や不空羅索 *Amoghapāśa* も登場する。また、それ以外の尊も蓮華部のシンボルである「蓮華」という語を名称の一部に持つ。ただし、TS には各尊の固有名は明瞭には示されず、マントラの名称として断片的に登場するにすぎない (§ 1513–1527)。一方、アーナンダガルバは各尊の尊容を説く際にそれぞれの尊名をあげている (TAK17.4.8ff.)。これらの正確なサンスクリット名は明らかではないが、TS のマントラ名に一致あるいはその一部に含まれるものが多い。

マンダラ全体の形はこれまでのものと同様である。これは TS に「[マンダラの形態は] 金剛界のようである」とあることにもとづく。その内部に蓮華をかたどった「内側のマンダラ」を描く。TS には門に隅を向けた第2の四角形を描くことによって蓮

華を表現すると規定される。ペンコル・チューデでもマンダラの楼閣に対して45度の角度で傾けた四角形がマンダラの中心に描かれているが、これと組み合わせられる「第1の四角形」は表現されていない。そのかわりに四隅には宝珠形のモチーフが描かれ、これが蓮華の花弁を模している。さらにその内部に「8柱を組み合わせる八葉蓮華を描け」というTSの指示にしたがい、これまでのマンダラでは金剛杵を描いた井桁の帯に蓮華のデザインが現れる。

マンダラに描かれる尊格については、TSはこれまでと同様にマンダラの中央に「仏のすがた」を描くよう述べる。これが毘盧遮那であることはTAKが明らかにしている。仏のすがたを置くのは花芯、すなわち蓮華の中央である。四波羅蜜についてはTSは「金剛、宝、蓮華、雑色の蓮華」を蓮華の中に入れよと述べる。ここでも四波羅蜜はシンボルで表現されるが、遍調伏品にふさわしく、業金剛女がこれまでの羯摩杵から雑色蓮華へとかわる。アーナンダガルバは順に「金剛杵のついた蓮華、蓮華のついた如意宝、16弁の金剛蓮華、4弁の雑色蓮華」と注釈をくわえる。ペンコル・チューデの作例もこれにしたがっている。

四仏と十六菩薩が位置する四方輪でも蓮華が重要なモチーフとなる。東のマンダラ（東方輪）をTSは「遍調伏のマンダラ」と呼び、その中心に世自在を置き、「金剛の慢心などによって、蓮華のシンボルを持つ仏などの摩訶薩を描け」と述べる。アーナンダガルバは東方輪の中尊を「観自在」と呼び、「金剛の慢心」については「金剛界大マンダラで述べた金剛薩埵以下[の4尊]を大印（すなわち尊形）によって[描く]」という説明をくわえている。「仏などの」という部分については、四方の尊であることを明らかにし、仏蓮華、蓮華鈎、蓮華愛、蓮華喜の4尊であると理解せよと述べる。また「蓮華のシンボルを持つ」ことについては「金剛界に描かれた菩薩の持物に蓮華が飾られている」と説明している。

南方輪についてTSは「中央に如来を、その四方には蓮華のシンボルを持つものたちをブリクティナーなどの方法で描く」とある。如来はアーナンダガルバによれば阿弥陀である。また「ブリクティナーなどの方法」については、蓮華ブリクティナーという尊が金剛界の虚空蔵菩薩（すなわち金剛宝）に相当し、この尊が蓮華の鈴を左手に握り、右手は蓮華の如意宝を額のところに当てた姿をすることと説明されている。それ以外の三尊は、それぞれ蓮華のついた太陽、輝き、笑いを手にするとアーナンダガルバは述べる。これは「蓮華のシンボルのついた」というTSの規定にも対応している。

西方輪は「蓮華に住して三昧に入った摩訶薩を描き、その四方に蓮華を見ることなどの方法で摩訶薩を置け」とTSにはある。中央の尊の名称についてはアーナンダガ

ルバも「摩訶薩」と呼ぶだけで不明である。「三昧に入った」という規定どおり、禪定の姿で描くようアーナンダガルバは指示する。「蓮華を見ることなどの方法で」については、第一の菩薩が金剛法の禪定に入っていることを「蓮華を見ること」と呼び、実際は蓮華の花弁を開く姿で描けという。その他の尊についての言及はここではなされない。

北方輪には中央に「四面の蓮華」を描けと TS は指示し、アーナンダガルバはこれを「大観自在が四面なのである」と言い換えている。四方の尊については「金剛の舞などの方法で」という TS に対して、「世尊蓮華舞自在のような姿をしていることを金剛の舞と呼ぶ」とアーナンダガルバは説明する。蓮華舞自在は北方の第1の菩薩である。シンボルに蓮華を合わせ持つことは TS でも TAK でも指示されている。

アーナンダガルバは TS の偈頌に対するこれらの語義釈とは別の箇所、すべての尊の特徴をくわしく述べている⁴⁰⁾。これを見ると、多くの尊は単に蓮華のシンボルを持つだけでなく、尊名に応じた独特の尊容で描かれたことがわかる。たとえば十六菩薩の第8番の十一面観音は、その名の通り、十一面をそなえ、さらに十二臂を持つ。11番は青頸観音で、実際にはヴィシュヌの姿をするという。13番が蓮華舞自在であることはすでに見たとおりである。5番のプリクティ、9番のターラーは代表的な観音の眷属で、それぞれ固有の特徴が広く知られている⁴¹⁾。このほか、10番の蓮華クマラ Padmakumāra は六面四臂をとるが、これはクマラ（カールティケーヤ）の特徴である。また第1の仏蓮華は釈迦の姿で描かれると TAK に説明されている。

八供養菩薩のうち、内の四供養菩薩については TS は「金剛嬉などにしたがって蓮華嬉などの女尊を」、また外の四供養菩薩については「蓮華香などの4人の供養の女尊を」それぞれ描くとあり、金剛界マンダラの八供養菩薩と同じように描かれる。門衛は TS では「ガナ」と呼ばれるのみでくわしい説明は含まれないが、アーナンダガルバは四摂であることを示し、とくにはじめの2尊には馬頭と不空羂索という名称もあげている。

4.3.2 遍調伏三昧耶マンダラ (図50)

ペンコル・チューデ仏塔の遍調伏品三昧耶マンダラは、向かって右側の約3分の1

40) TAK17.3.6-18.4.6.

41) TAK によればターラーは蓮華の花弁を開く姿で表現される。インドにのこされたターラーの作例は多くは右手で身願印を示し、左手に睡蓮を持ち [森喜子 1992]、この記述に合致しないが、オリッサ地方から出土した観音の脇侍に登場するターラーはしばしば未敷蓮華の花弁を開くしぐさであらわされる。

が後世の補修を受けているが、中心部分はオリジナルの姿をとどめている。

三昧耶マンダラ固有の表現方法であるシンボルが、ここでも仏たちにかわって描かれている。TSによれば、マンダラ全体は「大マンダラ」すなわち遍調伏大マンダラと同じように線を引く。そこに置くシンボルについては断片的に述べられている。中央の毘盧遮那は「金剛界自在印」で描く。アーナンダガルバはこれを「先端を西に向けた光輝く仏塔」と説明する。マンダラでは上が西であるので、直立した仏塔が毘盧遮那のシンボルである。四波羅蜜の位置には「法金剛など」を描けと TS は指示する。TAKによれば、東から順に微細金剛によって囲まれた金剛蓮華、南を向いて蓮華の飾りのある如意宝、色は白赤で西を向いた16弁の蓮華、さまざまな色の4弁の蓮華である。四方輪の中央に置かれるシンボルについては、TSは東には「蓮華に囲まれた蓮華」、以下右回りに、「巻髪 (jatā) の中の大きな蓮華にある仏灌頂」「蓮華の中に蓮華の印」「火炎に満ちて輝く蓮華」をあげる。TAKではより具体的に「白赤で16弁の金剛蓮華を別の蓮華が囲む」「16弁の金剛蓮華」「16弁の金剛蓮華」「4弁の雑色蓮華」と言い換えられている。これらの周囲の16尊についてはTSは「蓮華の印のついたシンボル」を描けと指示するのみで、個々のシンボルについては言及していない。TAKにはシンボル名が具体的に示されているが、多くの場合、金剛界品の三昧耶マンダラで用いられた十六大菩薩のシンボルに蓮華の装飾をつけたものとなっている。ただし、北方輪のはじめにあげられる蓮華舞自在は、その名の通り、「舞の手に握られた雑色蓮華」がシンボルとなり、金剛業菩薩のシンボルとは異なる。八供養菩薩や四摂も TSには具体的な記述はほとんど見られないが、通常の供物や鈎などに蓮華の装飾をつけていることが TAKによって知られる。

4.3.3 遍調伏法マンダラ (図51, 52)

これまでの法マンダラと同じように、ここでもすべての尊格は金剛杵の中に禅定に入った状態で描かれている。TSの記述は簡略で、「智恵の金剛杵の中に如来を描く。すべての方角に摩訶薩である種々自在者 (viśva-īśvara) などを禅定のすがたで描く」と述べるにとどまる。TAKには毘盧遮那に関しては、獅子座の上で五鈷杵の中で金剛跏趺坐で住しているように描き、心臓の外に米粒大の五鈷杵を保持していると述べられているが、これは、これまでの法マンダラにおける毘盧遮那の尊容ととくにかわることはない。その他の尊については、すべて遍調伏品の大マンダラで述べた姿で、蓮華と月輪の座の上に智恵の五鈷杵に住しているとアーナンダガルバは説明する。遍調伏品の大マンダラでは多臂の尊格がいくつか登場したが、ここでもその特徴を保つ

たまま、禅定に入った姿で描かれている。

4.3.4 遍調伏羯摩マンダラ (図53, 54)

ペンコル・チューデ仏塔の遍調伏羯摩マンダラは後世の描き直しであるため、文献との不一致が多く認められる。全体に表現も稚拙で洗練されていない。マンダラの形態はTSに「大マンダラのように」とあるので、これまでの3種のマンダラと同じでなければならないが、ペンコルの作品では中央の八葉蓮華のまわりに不必要な金剛杵の輪が描かれている。蓮華をあらわす四角形や四隅の蓮弁はかなり簡略化されている。

尊格についてTSは「仏(=毘盧遮那)のすべての方角に蓮華のシンボルを持つすべての尊格(sarvāh)を描け」と述べる。「すべての尊格」をあらわす語が女性形になっているのは、羯摩マンダラの諸尊が供養によって象徴される尊格であるためである。ただし、アーナンダガルバは大マンダラと同じ姿でこれらの尊格を描くよう指示し、実際には女尊の姿ではなく、大マンダラと同じ男尊の姿を考えていたらしい。しかし、ペンコル・チューデの作品では大マンダラと形態が一致しない尊が多く含まれる。たとえば毘盧遮那と四方輪の中央の4尊はいずれも鳥獣座に乗らなければならないが、台座は描かれていない。また、西方輪の第1の菩薩の位置に金剛杵が描かれたり、東方輪の第四の菩薩が丁字立ちであらわされている。いずれも復元時の描き誤りであろう。

4.3.5 遍調伏四印マンダラ (図40, 45~49)

これまでの金剛界品や降三世品と同様に、アーナンダガルバは5種の四印マンダラを説く。毘盧遮那四印マンダラは中央に毘盧遮那、周囲には四方輪の中央に置かれた遍調伏尊ら4尊を描く。残りの4種のマンダラはこれらの4尊をそれぞれ中心とし、周囲に菩薩を配する。いずれも中央の尊は尊形で、周囲の4尊は三昧耶形すなわちシンボルで描く。TSの本文に記述があるのはこのうち毘盧遮那を中心とする四印マンダラのみである。TSの記述は簡略で、マンダラ全体の形態はやはり大マンダラと同じで、その中央に「仏のすがた」を、その四方には「金剛の蓮華など」を描けと述べるにとどまる。アーナンダガルバは中央の毘盧遮那については「蓮華と獅子の座の上に、金剛界大マンダラで述べたように」描けと指示する。周囲のシンボルは、東から順に「蓮華と月輪の上に乗った蓮華のついた五鈷杵」「蓮華のついた如意宝」「16弁の金剛蓮華」「中央は白く、青、黄、赤、緑の4弁をそなえた蓮華」をあげる。その他の4種の四印マンダラでも、中央に遍調伏尊などの尊形が、その周囲には16尊のシン

ボルがそれぞれ描かれる。

ペンコル・チューデには5種すべての四印マンダラが現存し、文献の記述にもよく一致するが、西方輪に相当する蓮華三摩地の四印マンダラ(図46)のみは例外である。このマンダラは全体の表現形式も他の作品とは異なることから、描き直したものと考えられる。

4.3.6 遍調伏一印マンダラ(図41)

一印マンダラは遍調伏尊1尊を中央に描いたマンダラである。TSによれば「大マンダラにしたがって」マンダラを描き、その中央の蓮華に「さまざまな姿を持つもの」(viśvarūpa)を描く。遍調伏尊は世自在すなわち観自在菩薩と同一の尊格であるが、TSには「すべての姿を示す世自在」というフレーズが、遍調伏尊に対して用いられる(§1511)。「さまざまな姿を持つもの」というのはこの尊格の異称なのである。

4.4 一切義成就品

4.4.1 一切義成就大マンダラ(図74, 75)

摩尼部に相当する一切義成就品のマンダラは、摩尼すなわち宝が基調となる。マンダラのデザインも宝をかたどり、尊格も多くの場合「宝」の語を名称に含む。中尊が毘盧遮那であることはTS全体を通じて共通であるが、東方輪の中央の尊格で虚空蔵菩薩と同一視される一切義成就(sarvārthasiddhi)がこの品の中心的な存在である。TS本文にはマンダラに含まれる尊格の固有名は明瞭には示されていないが、前の遍調伏品と同様、各尊のマントラを示した箇所で見ることができ(§1868-1890)。またTAKにはチベット訳ではあるが各尊の固有名が用いられている(54.1.6-4.8)。四方輪に対してはTSは一切義成就、宝鬘、宝蓮華、宝雨という名称をあげており、四方輪の中尊の尊名としても用いられている。また東方輪の中尊のみは「金剛蔵」と呼ばれているが、これは虚空蔵菩薩の灌頂名である。

マンダラの形態に関しては「四角で四門、四つのトーラナで飾られ」ではじまる、金剛界品にも見られた定型句で規定される。一切義成就品固有の特徴としては、内側の都城が金剛宝(vajraratna)に等しいという表現が現れる。部族のシンボルが反映されているのである。ペンコル・チューデでは中央の円に黒地に宝を連ねた文様が描かれ、さらに四方と四隅に三弁の独特の意匠が現れる。TSの記述にしたがった宝のモチーフである。

マンダラに描かれる尊格についての具体的な記述は、一部の尊をのぞいてTSには

含まれない。中央のマンドラには「みずからの印」に囲まれた仏を描くとあり、これは毘盧遮那とその周囲の四波羅蜜を指す。四方輪にはすでに述べた4尊を描く。南の宝鬘は手に宝の鬘を持ち、同様に西の宝蓮華は宝の蓮華、北の宝雨は宝の雨を両手で降らせるというように、各名称に応じた姿がTSで指示されている。その周囲の16尊は、いずれも宝をシンボルとして持つのみ記される。八供養菩薩と四摂については所定の位置に描くことが述べられているが、やはり尊容に関する記述はない。アーナンダガルバは各尊の尊容をTAKの中でくわしく述べているが、十六大菩薩や八供養菩薩以下の尊格は、いずれも金剛界大マンドラの持物や印に宝をくわえたものがあげられている⁴²⁾。またTAKには賢劫尊についての記述が含まれ、ペンコル・チューデでも賢劫千仏が描かれているが、TS自体には賢劫尊への言及はない。なお、ペンコルの作例は向かって右側の約半分が描き直されており、主要な尊格が現れる中央の部分も、西と南の一部を除いてオリジナルではない。

4.4.2 一切義成就三昧耶マンドラ (図80)

一切義成就品の三昧耶マンドラは中央の毘盧遮那のみ尊形で、その他の尊はすべて三昧耶形で描かれる。TSはマンドラの中央に「仏の印」を描けと指示し、これに対してアーナンダガルバは「仏の印」とは「大印」すなわち尊形であると解釈する。その他の尊についてはTSは四波羅蜜と四方輪の中尊に限り、具体的なシンボル名をあげている。それによると、四波羅蜜のシンボルは摩尼、摩尼の輪、蓮華の中の摩尼、蓮華の摩尼に囲まれた摩尼で、四方輪の中央には、東から順に「大きな宝の摩尼」「二つの目をともなった摩尼」「摩尼と蓮華を組み合わせたもの」「宝のついた摩尼」を描く。そしてその周囲には16尊のシンボルとして摩尼の印のついた各自の印を描くよう述べる。八供養菩薩以下には言及はない。アーナンダガルバは毘盧遮那から四摂に至る37尊のすべてに関してそれぞれシンボルをTAKの中で列挙する⁴³⁾。TSには示されないものは、多くの場合、金剛界の三昧耶マンドラのシンボルに摩尼の印を付けたものとなっている。

4.4.3 一切義成就法マンドラ (図81, 82)

一切義成就品の法マンドラも、これまでの3品の法マンドラと同じように、シンボルで表現される四波羅蜜をのぞき、三昧に入り、胸に各自のシンボルを置いた姿で描

42) TAK53.4.3-54.4.8.

43) TAK65.1.3-5.1.

かされている。TS には「法マンダラの方法で、胸にシンボルを描け」という記述があるのみで、具体的な説明は与えられていない。アーナンダガルバも「毘盧遮那から賢劫尊に至るまで、五鈷杵の中に結跏趺坐ですわり、米粒大の各自のシンボルを心臓の外に保つ」と、これまでの法マンダラを同じ説明をするにとどまる。

4.4.4 一切義成就羯摩マンダラ (図83, 84)

マンダラに関する TS の記述は一切義成就品ではいずれもかなり簡略化されている。羯摩マンダラでも、大マンダラのようにマンダラの線を引いたあとは中央に「仏のすがた」を置き、「摩訶薩にしたがって宝の薩埵女を描け」という記述が登場するにすぎない。アーナンダガルバは「摩訶薩にしたがって」という部分に対して「大マンダラで描いたように描く」と注釈をくわえる。ペンコル・チューデ仏塔では一切義成就品の大マンダラの主要な尊格が描き直されているため比較できないが、逆に羯摩マンダラから大マンダラのオリジナルな形態が予想される。

4.4.5 一切義成就四印マンダラ (図69, 70, 76~79)

TS には一切義成就品四印マンダラに関する記述はほとんど含まれない。わずかに「四印マンダラの方法でマンダラを考察せよ」という記述が現れるにすぎない。アーナンダガルバは毘盧遮那の四印マンダラについては「一切義成就大マンダラで述べた座、身色、姿などをそなえた毘盧遮那と、東には蓮華と月輪に乗った金剛宝、南には金剛摩尼の芽、西には摩尼の蓮華、北には摩尼の雨」を描くよう説明する。ペンコルでは南以外の方角には宝を先端につけた金剛杵や蓮華、羯摩杵が描かれている。その他の4種の四印マンダラは TS には言及はないが、アーナンダガルバにしたがい、ペンコル・チューデでは一切義成就尊以下の4尊の四印マンダラを大マンダラの周囲に配している。4種のマンダラはいずれも中央尊は尊形で、その他の4尊はシンボルで描かれている。アーナンダガルバによれば、これらのシンボルは大マンダラで説いた16尊の持物などに一致することになっている。ただし、ペンコルの一切義成就 (図79) と宝蓮華 (図77) の2種のマンダラは後世の描き直しである。

4.4.6 一切義成就一印マンダラ (図71, 72)

TS によれば一印マンダラは「一切成就」(sarvasiddhi) のマンダラである。東方輪の一切義成就のみを中央に描く。アーナンダガルバは一切義成就大マンダラのように、この尊を蓮華と月輪の上に描けと指示する。ペンコルでは黄色い身色で右手で与願印

を示す姿で描かれている。周囲の八区画に描かれている独特の文様は、宝を表現したものである。

謝 辞

ベンコル・チューデ仏塔の貴重な写真をお貸し下さった中京女子大学助教授正木見氏に謝意を表します。また、本稿執筆に当たり、高野山大学助教授乾仁志氏からは、さまざまご教示をいただいた。さらに草稿の段階にもかかわらず、御論考 [乾 1996b] を拜見する機会を得た。あわせて御礼申し上げます。

略号

TAK: *Tattvālokaḥarī*

TS: *Tattvasaṃgraha*

TTP: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition (『影印北京版西藏大蔵経』鈴木学術財団).

大正蔵：大正新脩大蔵経

文 献

BŠOD NAMS RGYA MTSHO

1983 *The Tibetan Maṅḍalas, the Ngor Collection*. Tokyo: Kodansha.

堀内寛仁

1974 『初会金剛頂経の研究』(下) 高野山大学密教文化研究所。

1984 『初会金剛頂経の研究』(上) 高野山大学密教文化研究所。

乾 仁志

1995 「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて (前)」『高野山大学密教文化研究所紀要』9: 1-26。

1996a 「『初会金剛頂経』の四大品とマンダラの特徴」『高野山大学創立百周年記念 高野山大学論文集』高野山大学, pp. 95-114。

1996b 「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて (後)」『高野山大学密教文化研究所紀要』10: 1-28。

ʼJAM DBYAN BLO GTER DBANG PO

1971 *rGyud sde kun btus. Texts Explaining the Significance, Techniques and Initiations of a Collection of One Hundred and Thirty two Mandalas of the Sa-skyapa Tradition*. Vol. 4. Delhi: N. Lungton & N. Gyaltan.

LOKESH CHANDRA (ed.)

1987 *Sarvatathāgata-tattva-saṅgraha: Sanskrit Text with Introduction and Illustrations of Maṅḍalas*. Delhi: Motilal Banarsidass.

松長有慶

1969 『密教の歴史』平楽寺書店。

密教聖典研究会

1986 「Vajradhātumahāmaṅḍalopāyikā-Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳 (I)」『大正大学総合仏教研究所年報』8: 24-57。

1987 「Vajradhātumahāmaṅḍalopāyikā-Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳 (II) 完」『大正大学総合仏教研究所年報』9: 13-85。

- 森 雅秀
 1990 「バーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6: 69-111。
 1992 「カトマンドゥ市タン・バヒー寺の法界語自在マンダラ」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』8: 47-68。
 1993a 「賢劫十六尊の構成と表現」『宮坂有勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法蔵館, pp. 909-937。
 1993b 「サンヴァラマンダラの図像学的考察」『曼荼羅と輪廻』（立川武蔵編）佼成出版社, pp. 206-234。
 1996a 「マンダラの形態の歴史的変遷」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』法蔵館, pp. 101-124。
 1996b 「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』15: 28-42。
- MORI, M. & Y. MORI
 1995 *The Devīmāhātmya Paintings Preserved at the National Archives, Kathmandu. Bibliotheca Codicum Asiaticorum No. 9.* Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco.
- 森 喜子
 1992 「バーラ朝の女尊の図像的特徴（3）」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』8: 69-114。
- 奥山直司
 1987 「万神の集い——パンコル= Cholten に関する調査報告」『日本西蔵学会々報』33: 15-20。
 1988 「チベット密教パンテオン形成に関する二つの課題」『印度学仏教学研究』36(2): 94-100。
 1989 「イコンの園へ——パンコル・Cholten 研究序説」色川大吉編『チベット・曼荼羅の世界——その芸術・宗教・生活』小学館, pp. 131-168。
- RICCA, F. & E. LO BUE
 1993 *The Great Stupa of Gyantse: A Complete Tibetan Pantheon of the Fifteenth Century.* London: Serindia.
- 白石真道・酒井真典
 1958 「初会金剛頂経降三世品の一節について」『密教文化』41・42: 99-118。
- 立川武蔵
 1995 「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界マンダラ」訳註」『密教図像』14: 1-33。
- 田中公明
 1987 「ベンコルチューデ寺院の金剛曼荼羅——G. Tucci 報告の報告と現況を比較して」『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』8: 81-101。
 1988 「ベンコルチューデ仏塔と『初会金剛頂経』所説の28種曼荼羅」『密教図像』6: 1-13。
 1996 『インド・チベット曼荼羅の研究』法蔵館。
- [TIBET HOUSE, NEW DELHI]
 1972 *Encyclopedia Tibetica: The Collected Works of Bo-dön Pañ-chen Phyogs las rnam rgyal, Vol. 44.* New Delhi: Tibet House.
- 梅尾祥雲
 1927 『曼荼羅乃研究』高野山大学出版部。
- YAMADA, ISSHI
 1981 *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha nāma mahāyāna-sūtra.* Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Vol. 262. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 頼富本宏
 1981 「密教における部族 (kula) の展開——とくに三部の形成について」『大乘仏教から密教へ』春秋社, pp. 415-429。